研　究　紀　要

1986

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　　次

＝講演録＝

古墳時代の大刀　小林　行雄……（1）

埼玉県大宮台地の先土器文化　水村孝行　田中英司　西井幸雄……(21)

縄文時代中期前葉の住居形態　石塚和則……(64)

北武蔵における古瓦の基礎的研究Ⅰ
昼間孝志　宮　昌之　藤原高志
木戸春夫　赤熊浩一　……(97)

縄文時代中期前葉の住居形態

石　塚　和　則

1　はじめに
2　分類の方法
3　事例各説
4　上屋構造の推定
5　空間的分布と問題点
6　おわりに

1　はじめに

縄文時代中期土器群に関する編年、細分研究は、近年多くの研究者によって着手され、深化されつつある。中期後半の加曽利E式については、神奈川考古同人会を中心とした一連の活動（神奈川考古同人会1980）、また、1981年の日本考古学協会秋の大会では北関東地方を中心とした中期全般の編年に関するシンポジウムが行なわれ、栃木県を中心とした近県の研究動向が提示される等、かなりの盛況振りである。中期前葉については佐藤達夫の論攻（佐藤1974）が出発点となり、五領ヶ台式から勝坂式に至る経過を西村正衛の阿玉台式土器の編年案と対比させる方法を基礎として研究が進んでいる。埼玉県でも土肥孝、谷井彪、中島宏、中村倉司らによって労作が相次いで発表された（中島1977、中村倉司1980、土肥孝1981、谷井彪1982）。

このような研究動向の中で、縄文時代前中期前葉の資料は着実に蓄積されてきた。しかし、その一方集落構造や住居跡形態に対して関心が薄かったと言える。中期前葉、特に五領ヶ台式、阿玉台式貉沢式、新道式土器を伴なう遺構が集落単位の調査でもそれほど多く認められなかったことが、その主たる要因であろう。当該期の遺構検出例として、以前より阿玉台式を伴なう千葉県船橋市高根木戸遺跡、同松戸市子和清水貝塚があった。特に後者では該期住居群が、２群に分かれつつ、環状に廻るということで注目された(清藤1977)。しかし、両遺跡とも集落規模と、始期から末期にかけての遺構分布に関して言及するにとどまり、住居個別の形態については論じられなかった。上記２例に関してもこの様な状態であり、他の小規模な調査、検出例は、それこそ中期集落資料の山に埋没してしまった感がある。五ヶ領台、貉沢、新道式土器を伴なうものは阿玉台式に比してなお貧弱である。その例として佐藤の取り上げた埼玉県所沢市膳柵遺跡例、同大宮市下加遺跡例等数例にすぎない。また、土器自体の実体も不明確な点が多かった。

佐藤の論攻はこのような状況を打破する強力な一撃となった。近年それに呼応するかの様に重要な集落跡が検出された東京都八王子市神谷原遺跡の報告書が刊行された(吉田他1982)。東関東でも

千葉県千葉市蕨立遺跡、同柏市水砂遺跡、同市中山新II遺跡等、良好な阿玉台式土器を伴なう集落跡が発表されている(岡崎他1982、清藤他1983、1984)。これらの資料が該期、特に阿玉台式前半の土器を伴なう住居跡の特異性に対して関心を高めた。中山新田II遺跡報文中では田中豪が、また茨城県では東関東地方のものを中心に、鈴木美治が住居跡の形態分類を試みている(鈴木1983、田中1984)。宮本長二郎も関東地方全域の縄文時代竪穴住居跡の資料を網羅し、その系譜を論じているが、その中で阿玉台式土器を伴なう住居跡の特異性について触れている(宮本1983)。

本稿では上記の成果を踏まえ、住居跡平面形の分類、上屋構造の推定、集落の分布等の観点から当該期の竪穴住居跡、集落跡の分析を試みたいと思う。本稿で取り上げた資料は主として阿玉台Ⅰb～II式期のものとそれに共伴すると考えられる貉沢、新道式期を主体としているが、阿玉台II式との関係から藤内式、住居形態の特性から阿玉台III式期のものも一部含んでいる。まだ、五領ヶ台式期のものについてはまとまった資料が少ないため今回は割愛した。

2　分類の方法

筆者が今回分類の対象とした資料は、関東地方の28遺跡であり、住居跡軒数は115軒を数える。ここでは住居跡平面形態を分類し検討することとする。分類方法については主として鈴木美治の案に拠ることとした(鈴本1983)(註1)。

阿玉台式土器を伴なう住居跡は炉を持たないことや柱穴の特異な配置から分類基準が細かくなっている。勝坂系土器を伴なうものは、主柱穴数はあまり考慮に入れず、基本構造を4本主柱式と考えて一括している。それは構造上、中期後半まで続くいわゆる「中期型」の様相を呈し安定した形と理解したためである。

分類基準は以下の通りである。

(1)平面形

A型―円形、楕円形、またはそれに準ずるもの。

B型―方形、長方形、またはそれに準ずるもの。

(2)柱穴配置

1類―中央に1箇所主柱穴を配するもの。周囲に支柱穴様ピットを持つものを含む。

2類―直線的、あるいは長軸上に数箇所の主柱穴を配するもの。支柱穴様ピットを持つものを含む。

3類―平面的に多角形に主柱穴を配するもの。基本形は4箇所のものとし、3箇所以上のものを一括する(註2)。

4類―その他、主柱穴を持たないもの。

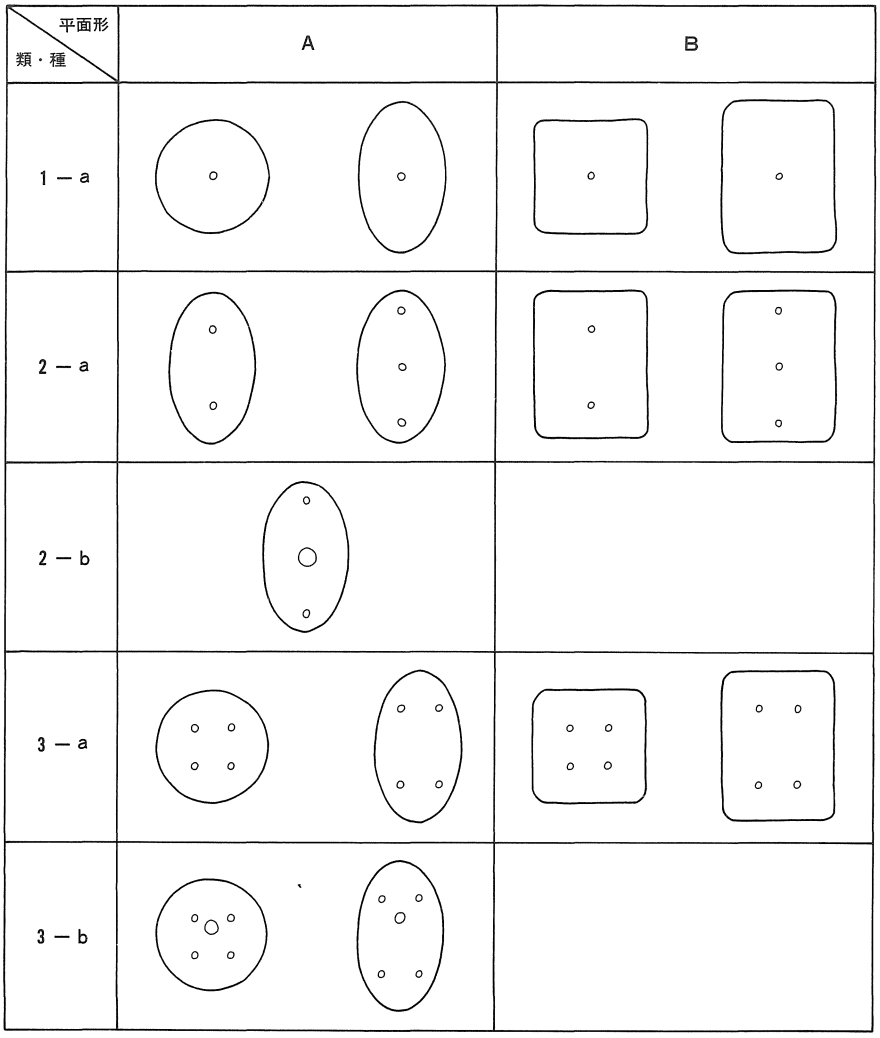
1類、2類はそれぞれ「中心主柱型」、「主軸上主柱型」と仮称しておく。

(3)炉跡の有無

a種―炉跡を伴なわないもの。

b種―炉跡を伴なうもの。

b種については西関東、東関東を問わず、土器埋設炉が圧倒的に多いため、炉跡自体の種別は行



第１図　基本形態模式図

なわないこととする。

上記の観点から各形態の基本形を模式化したのが第１図である。

※３類の中でも梁行の非常に狭いものを3′類とする。また、B－２－b、B－３－b、A、B－４－a・bは類例がないのと図化不能のため除いた。

3　事例各説

ここでは各県別に事例を呈示し、軒数、形態、時期等の観点から若干の検討を加える。また、各形態の共存関係や時間的変遷についても若干触れることとする。

栃木県

袋状土壙とそれに伴う阿玉台Ⅲ・Ⅳ式土器の出土が多いが、該期住居検出例は少ない。また本稿では二段堀込み遺構は除いてあるため、それから対象をしぼると２遺跡となる。

①石関遺跡（第２図―１）

第１号住居跡は不整楕円形プランを呈し、４箇所に主柱穴を規則的に配するＡ―３―ａである。伴出遺物から見て本例は阿玉台Ⅱ式期のものと考えられる。遺構内には小規模な袋状土壙があるが報文では充塡土と伴出遺物より住居跡に共伴するものとしている(註3)。

②石神遺跡（第２図―２）

縄文時代中期の住居跡が５軒検出されているが、Ⅰ区２号住居跡以外は大木8a式土器を伴う阿玉台式末期と考えられるため除外した。Ⅰ区２号住居跡は４箇所に主柱穴を配するＡ―３―ａ型で阿玉台Ⅱ式期の所産と考えられるが、出土遺物について報文中では伴出するものかどうか疑問視している。本稿では出土状況より考えて住居帰属時期に近似すると考え、取りあげた。

茨城県

本県では利根川下流域及び霞ヶ浦沿岸に該期遺跡の集中が知られるが、貝塚を対象とした層位的調査がその主体である。本稿では１遺跡を取り上げたのみである。

③下広岡遺跡（第２図―３～4）

本遺跡では類似遺構が２軒検出されている。第28号住居跡は中央主柱穴のＢ―１―ａ、第37号住居跡は長軸上に２箇所の主柱穴を有するＢ―２―ａ型である。２軒ともに周溝を有するという点で他に比して特異な存在である。規模・柱穴配置から該期住居跡としても良いと思われる。ただし、第28号住居跡については伴出遺物の記載がないが、形態上該期のものとした。

千葉県

本県では該期資料が豊富で本稿で扱った資料だけでも10遺跡を数える。

④中山新田Ⅱ遺跡（第３図―６～10、第４図―11～14）

本遺跡では９軒の住居跡が検出されているが、内３軒は阿玉台Ⅲ式期の所産と考えられる。比較対照の関係より提示した。

中央に１箇所の主柱穴を有する円形プランのＡ―１―ａ型には002、043住居跡の２軒がある。伴出遺物は前者が阿玉台Ⅰb～Ⅱ式、後者は上層よりⅢ式の小破片が出土したのみである。方形プランのＢ―１―ａ型では029住居跡があり、阿玉台Ⅱ式を伴う。４本主体柱を基調とするＡ―３―ａ、Ａ―３―ｂ型は阿玉台Ⅱ～Ⅲ式にかけて登場する。前者には015、039、056、061住居跡があり015住居跡は３′―ａ型の類型であろう。Ａ―３―ｂ型は057住居跡のみである。また様相の不明確な055号住居跡はＡ―４―ａ型とした。阿玉台Ⅱ～Ⅲ式土器は伴出する。形態別に立地を考えた場合、１―ａ型に斜面部に点々と分布し、３―ａ、３―ｂ、４―ａ型は調査区西部の斜面にまとまって検出され

ている。これは時間的変遷とも合致するようである。

⑤水砂遺跡（第3図―15～17）

中期の住居跡が5軒検出され、内3軒、027、028、029住居跡が阿玉台Ⅰb式期のものである。住居形態はA―1―a型で、典型的な様相を呈し、同時存在の可能性が高い。住居占地は中山新田Ⅱ遺跡とは異なり、台地のやや奥まった基部付近に分布する。

⑥東平賀遺跡（第3図―18～19）

阿玉台式期の所産と考えられる住居跡が2軒検出されている。1号住居跡は伴出遺物が不明確であるが形態上該期としている(渋谷1983)。2号住居跡は阿玉台Ⅰb式土器を伴っている。両者ともA―1―aあるいはA―2―a型と考えられる。

⑦子和清水貝塚（第4図―20。28、第5図―29～34）

本遺跡では多数の該期住居跡が検出されているが、本稿では報文（松戸市教育委員会1978）で遺物が明確なものを第一とし、第二に住居形態が類似するものを取り上げた。

中心主柱の1―a型には、33、96、111、117、252、256号住居跡があり、B―1―a型が主体的である。時期は阿玉台Ⅰb～Ⅱ式期と思われる(註4)。長軸上に複数の主柱穴を配する2―a型は4軒あり、1、90、92、(139号住居跡があたる。1―a型と同様、方形、長方形プランが主体的である。時期についても1―a型と同じで、共存の可能性が考えられよう。3―a、3′―a型には102、122、143、160号住居跡がある。時期は阿玉台Ⅱ式以降のものである。また、このタイプでも方形、長方形プランのB―3―a、B―3′―aが主体的で、本遺跡の一つの特徴といえよう。炉を有するA―3―b型は149号住居跡のみである。伴出遺物は阿玉台Ⅱ式と藤内Ⅰ式である。

各形態の占地状況は1―a、2―a型が東西二群に分かれて比較的、疎に分布する。これに対して3―a、3′―a、3―b型は集落外縁、東側にまとまって位置している。時間的、形態的にも後者の方がやや新しいと考えられ、占地にその差が表れているとしても良いと思われる。

⑧西山遺跡（第5図―35～36）

本遺跡では3軒の阿玉台式土器を伴う住居跡が検出され、内2軒が調査された。第1号住居跡は柱穴の配置が不規則なA―4―a型である。阿玉台Ⅰb～Ⅱ式土器が出土している。第2号住居跡はB―1―a型で阿玉台Ⅰb式期の所産と思われる。また狢沢式土器の共伴が認められる。

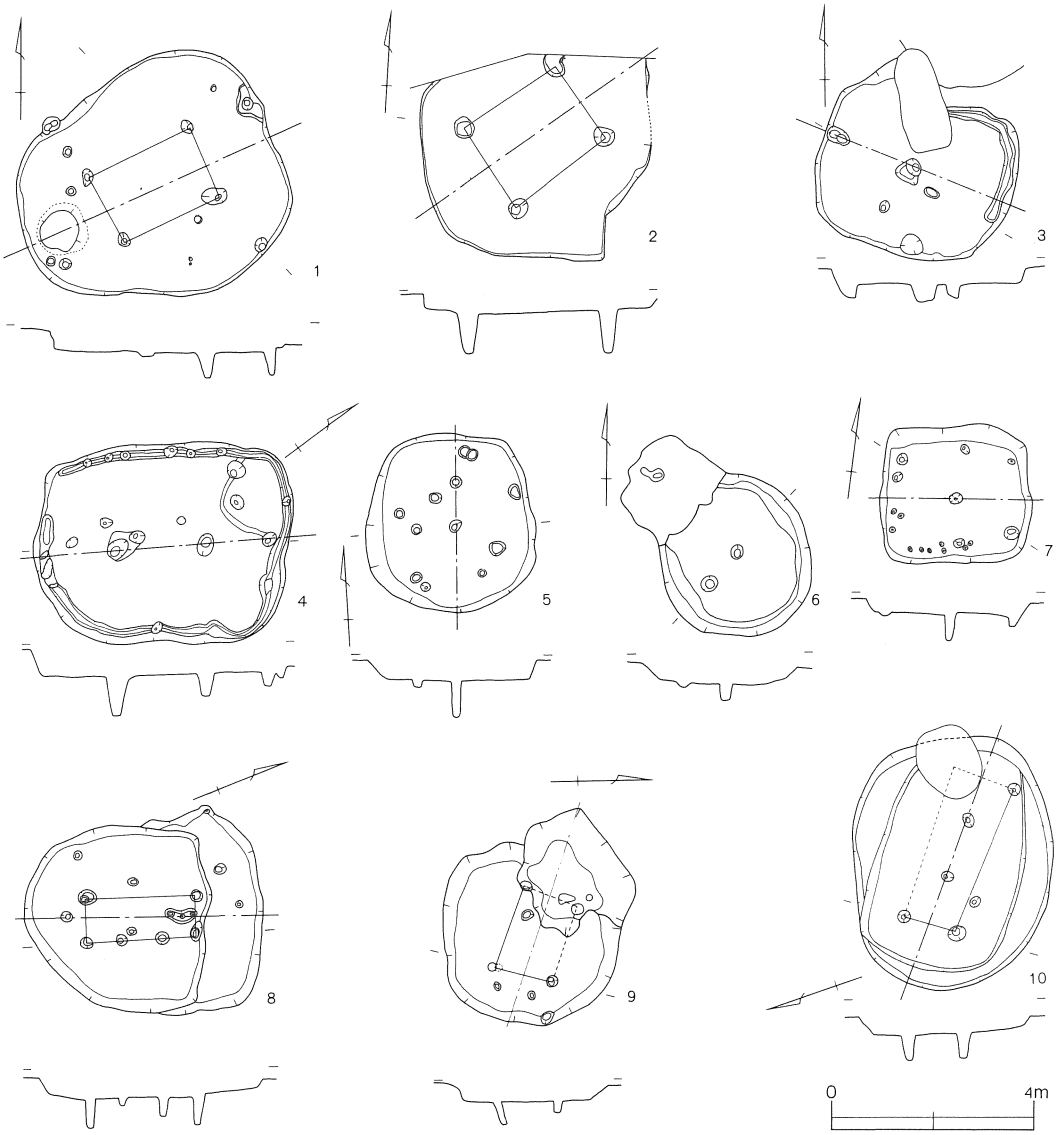
⑨大堀込遺跡（第5図―37～39）

阿玉台Ⅰb式期の住居跡が3軒検出されている。住居形態は、やや不整であるが、いずれも隅丸方形のB―1―aと考えられる。付近には縄文時代中期の集落と思われる双賀辺遺跡があり、本遺跡はその縁辺の一部と考えられる。

⑩高根木戸遺跡（第6図―40～41）

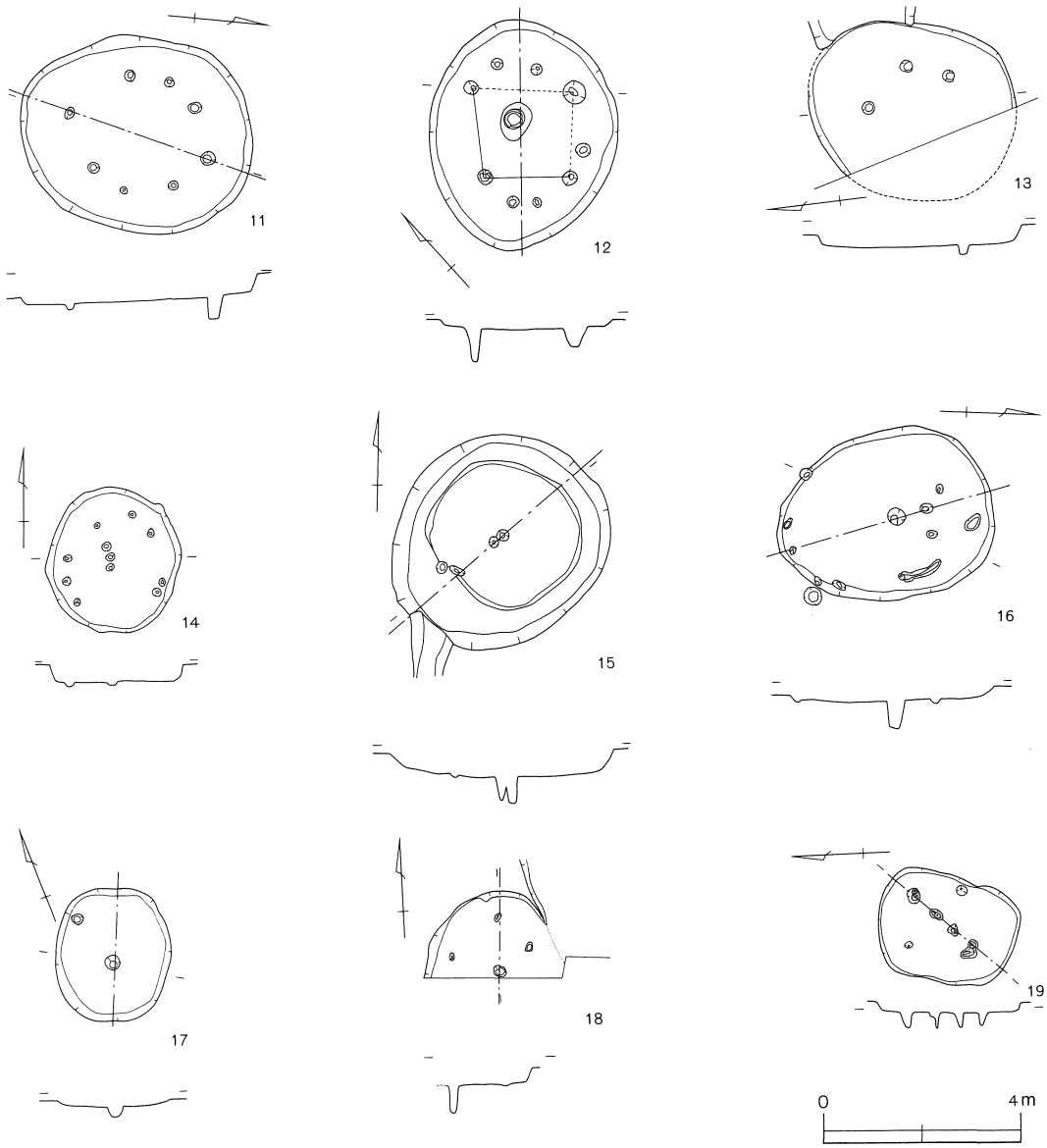
本遺跡では3軒の阿玉台式期の住居跡が検出されているが、1軒は報文中に伴出遺物が記載されていないため本稿では除いてある。第72号住居跡は阿玉台Ⅰb式土器を伴出している。住居形態はA―2―a型である。第42号住居跡は大略不整方形を呈するB―3―a型で阿玉台Ⅱ式土器を伴っている。本遺跡における該期住居跡は集落最外縁斜面近くに占地している。

⑪飯山満東遺跡（第6図―42～43）



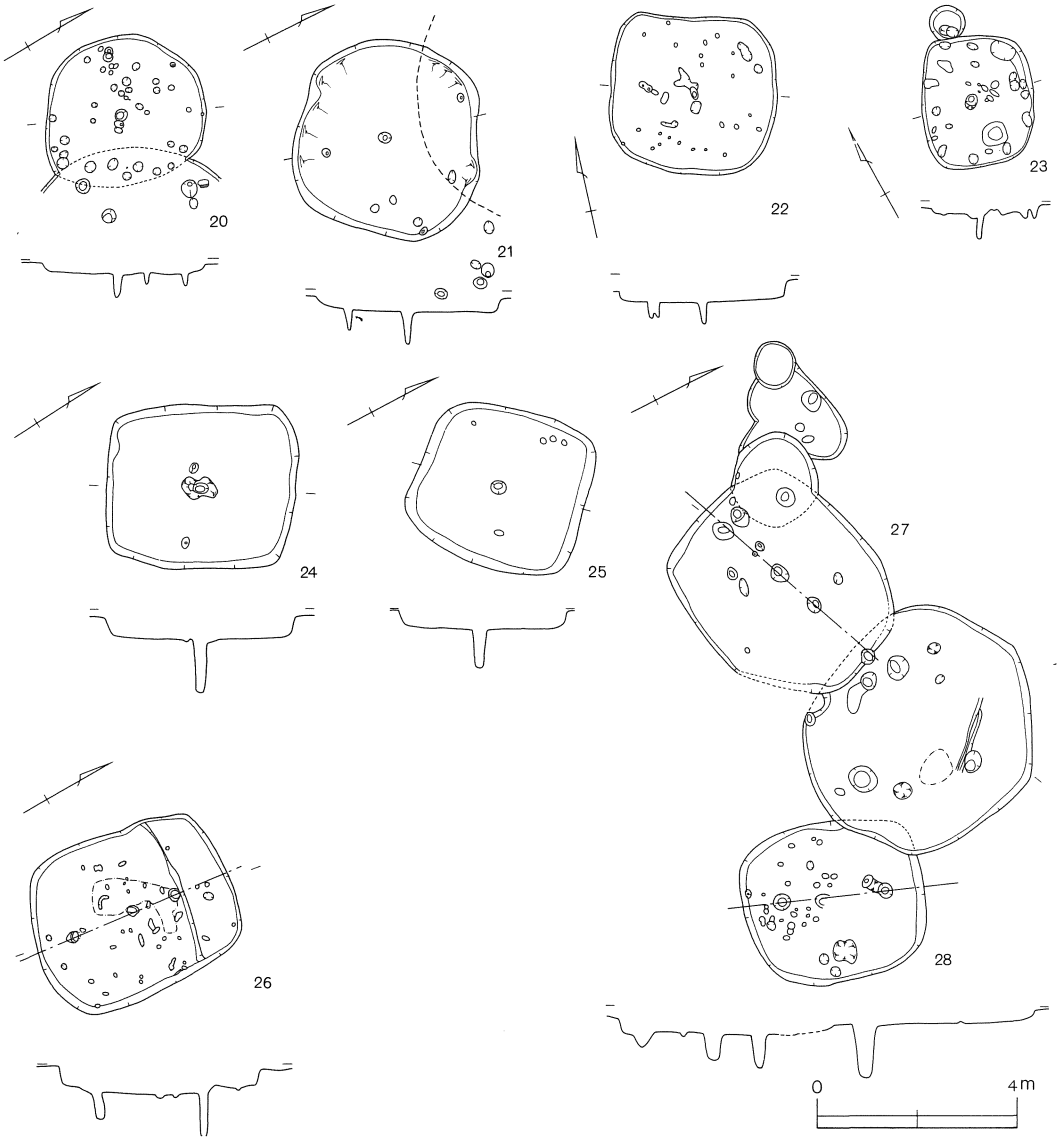
図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
1	石関	第1号住居跡	A－3－a	5.30×4.50	13 (4)	×	阿 II
2	石神	I区2号住居跡	A－3－a	(4.60×3.90)	4 (4)	×	阿 Ib ～ II
3	下広岡	第28号住居跡	B－1－a	3.90×3.10	6 (1)	×	不明
4	〃	第37号住居跡	B－2－a	5.00×3.90	17 (2)	×	阿 II
5	中山新田II	002 住居跡	A－1－a	3.50×3.30	12 (1)	×	阿 II
6	〃	043 住居跡	A－1－a	径3.10	2 (1)	×	阿 II
7	〃	029 住居跡	B－1－a	3.00×2.70	17 (1)	×	阿 II
8	〃	015 住居跡	A－3′－a	4.70×3.60	13 (4)	×	阿 II ～ III
9	〃	039 住居跡	A－3－a	3.50×3.40	8 (4)	×	阿 II
10	〃	056 住居跡	A－3－a	5.00×3.70	6 (4)	×	阿 II ～ III

第2図　住居跡集成図(1)



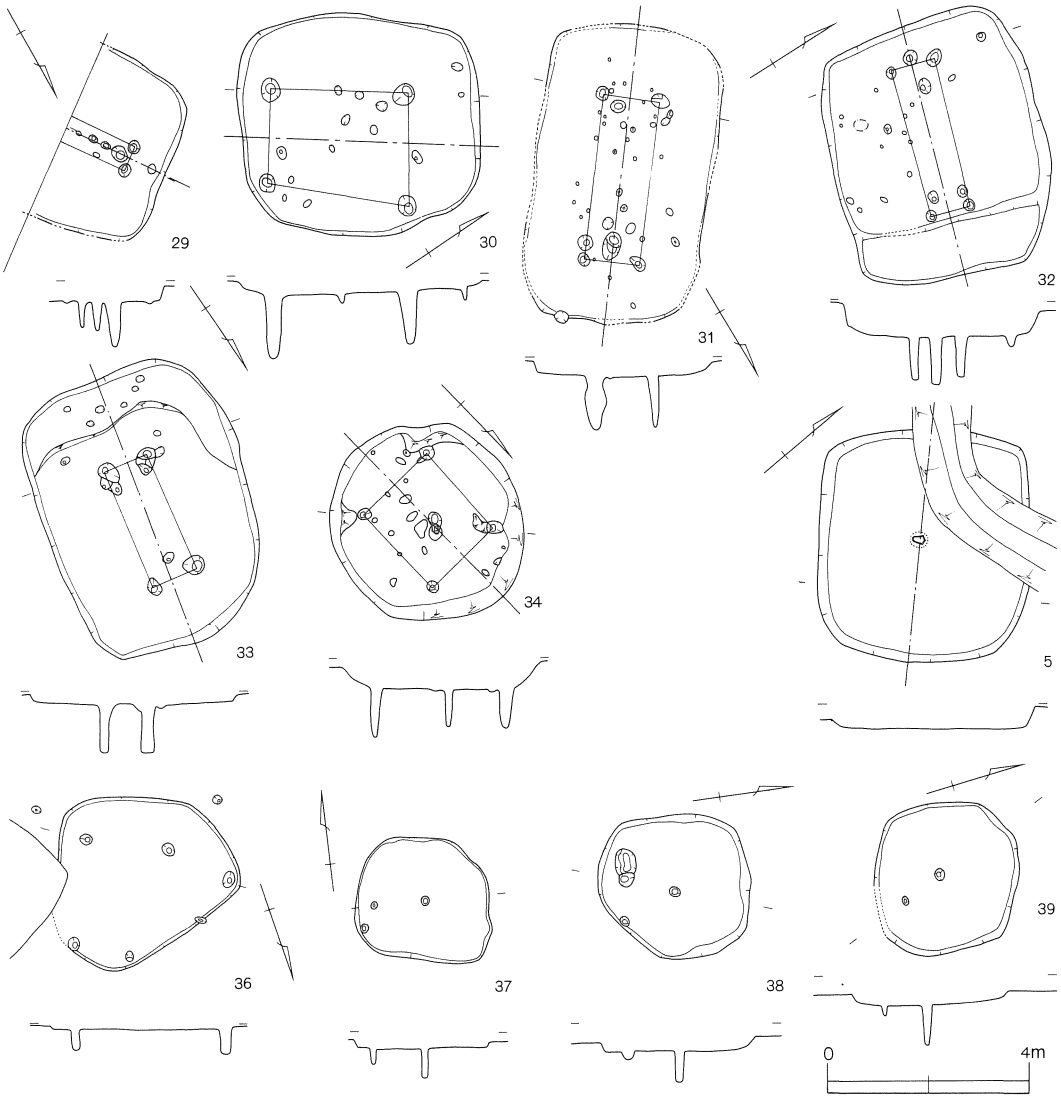
図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
11	中山新田II	061 住居跡	A－3－a	4.70×4.00	8 (?)	×	阿 III
12	〃	057 住居跡	A－3－b	4.70×3.80	9 (4)	埋	阿 III
13	〃	055 住居跡	A－4－a	(4.10×3.60)	3 (?)	×	阿 II ～ III
14	〃	033竪穴状遺構	A－4－a	2.90×2.60	11 (?)	×	不明
15	水砂	027 住居跡	A－1－a	4.60×3.40	4 (1)	×	阿 Ib
16	〃	028 住居跡	A－1－a	4.50×3.40	10 (1)	×	阿 Ib
17	〃	029 住居跡	A－1－a	2.70×2.60	2 (1)	×	阿 Ib
18	東平賀	2 号住居跡	A－1－a	?×(2.90)	4 (1)	×	阿 Ib
19	〃	1 号住居跡	A－2－a	2.90×2.10	7 (4?)	×	阿

第3図　住居跡集成図(2)



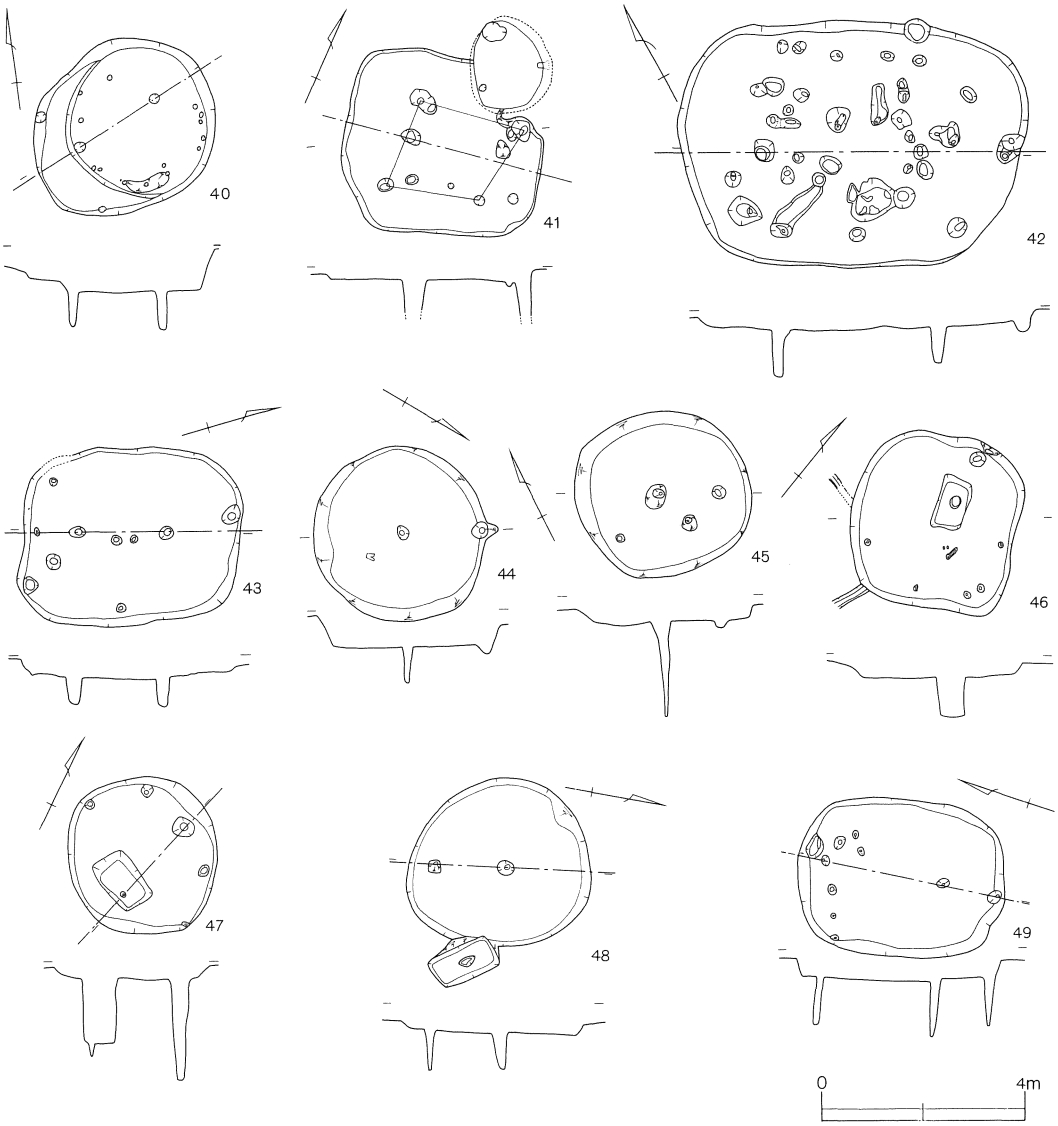
図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
20	子和清水	251号住居跡	A－1－a	(3.20×3.00)	4 (1?)	×	阿 Ib
21	〃	256号住居跡	A－1－a	3.7×3.6	5 (1)	×	阿 II
22	〃	33号住居跡	B－1－a	3.3×3.1	7 (1)	×	阿 Ib ～ II
23	〃	96号住居跡	B－1－a	2.6×2.2	17 (1)	×	不明
24	〃	111号住居跡	B－1－a	3.7×3.2	3 (1)	×	阿 II
25	〃	117号住居跡	B－1－a	3.2×3.2	6 (1)	×	阿 II
26	〃	1号住居跡	B－2－a	4.2×3.3	4 (2)	×	阿 Ib
27	〃	92号住居跡	B－1－a	3.7×3.0	9 (1)	×	阿 I b ～ II
28	〃	90号住居跡	B－2－a	3.6×3.2	8 (2)	×	阿 II

第4図　住居跡集成図(3)



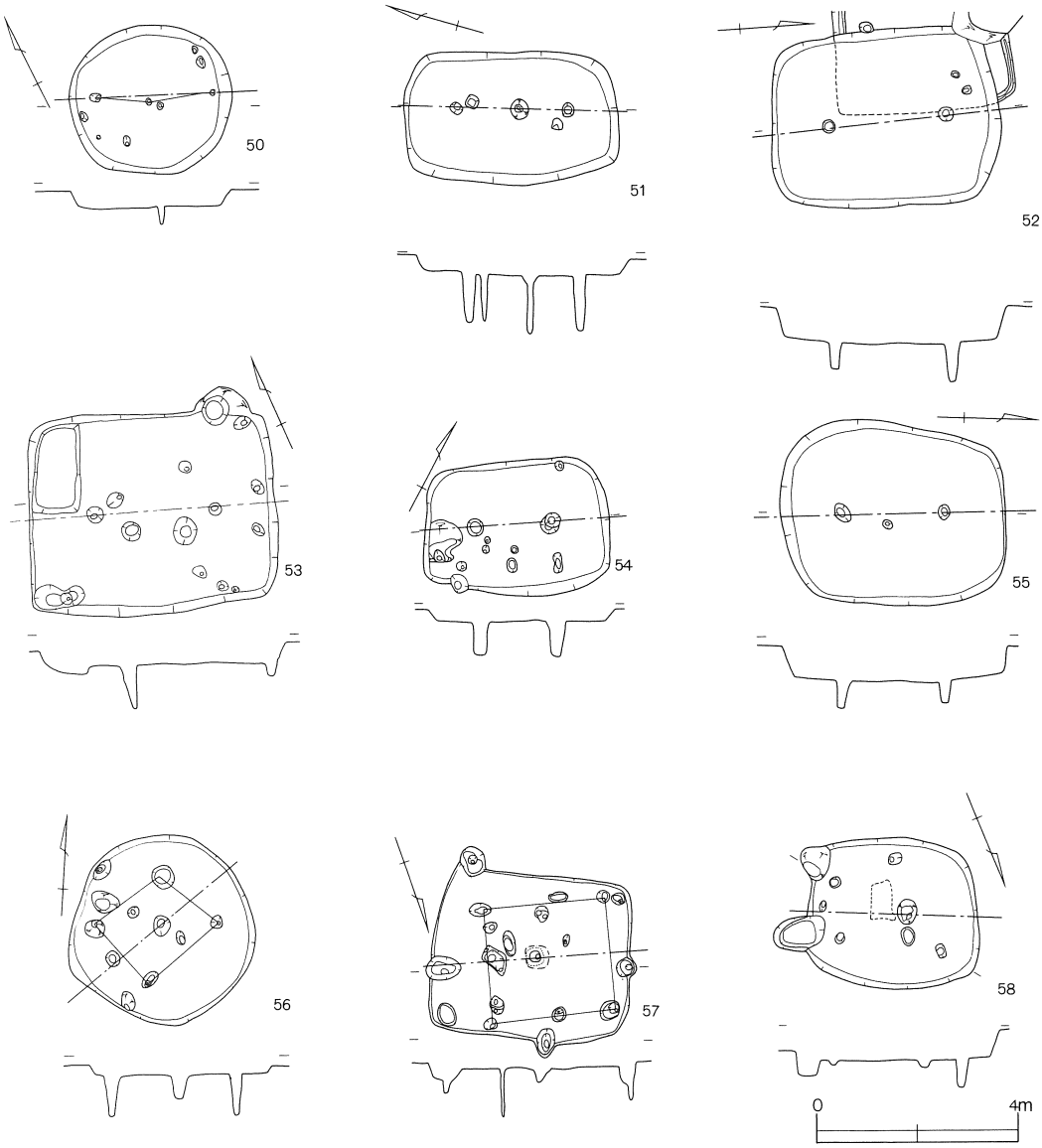
図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
29	子和清水	139号住居跡	B－2－a	?×3.7	5 (1)	×	不明
30	〃	122号住居跡	B－3－a	4.8×4.4	10 (4)	×	不明
31	〃	143号住居跡	B－3－a	6.0×3.5	13 (4)	×	阿 II
32	〃	160号住居跡	B－3′－a	5.1×4.2	10 (4)	×	阿 II
33	〃	108号住居跡	B－3′－a	5.6×4.1	16 (4)	×	不明
34	〃	149号住居跡	A－3－b	4.1×3.7	8 (4)	埋	阿 II
35	西山	第2号住居跡	B－1－a	4.42×3.75	1 (1)	×	阿 Ib
36	〃	第1号住居跡	A－4－a	3.60×3.25	6 (?)	×	阿 Ib
37	大堀込	J－1号住居跡	B－1－a	3.0×3.0	3 (1)	×	阿 Ib
38	〃	J－2号住居跡	B－1－a	3.2×3.0	3 (1)	×	阿 Ib
39	〃	J－3号住居跡	B－1－a	3.0×2.9	2 (1)	×	阿 Ib

第5図　住居跡集成図(4)



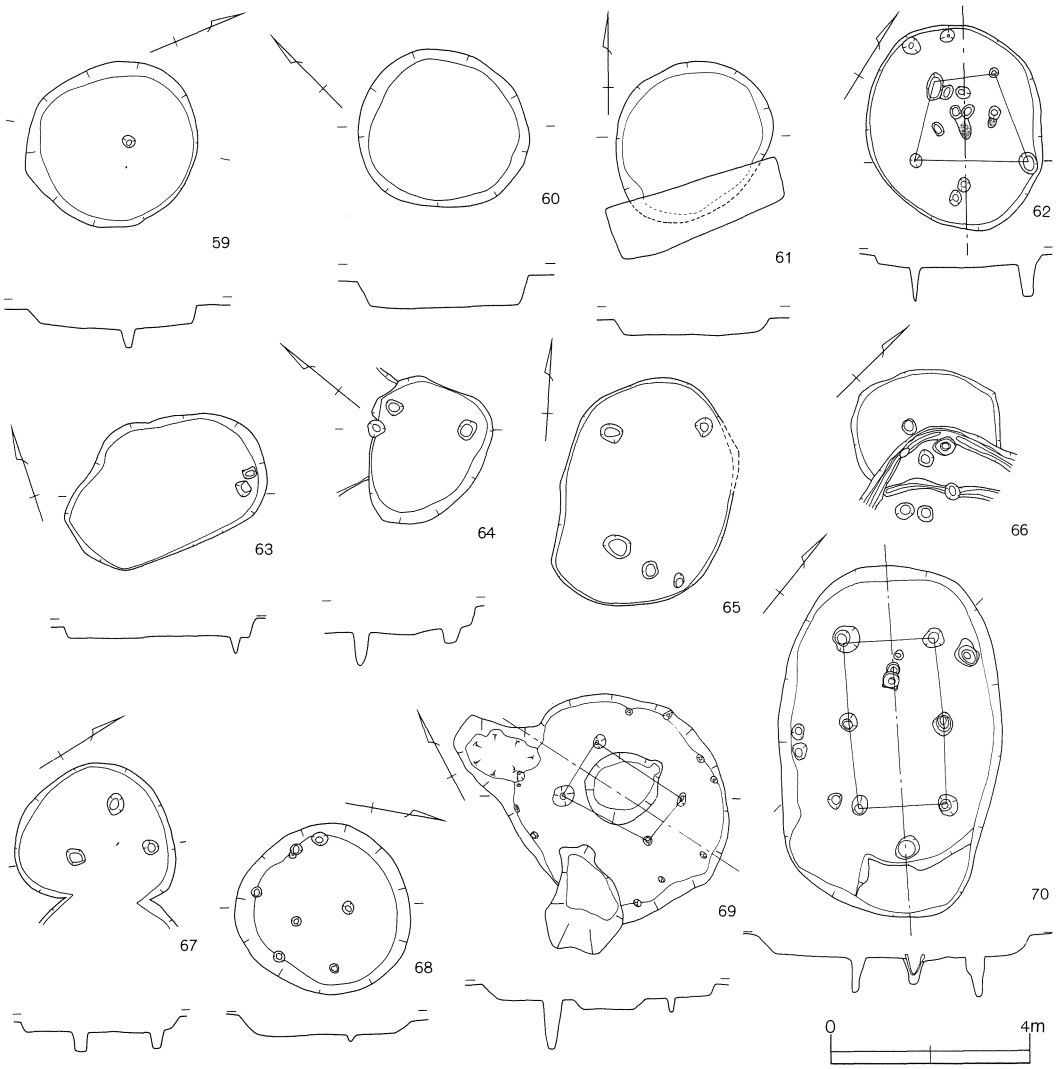
図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
40	高根木戸	第72号住居跡	A－2－a	3.75×3.35	18 (2)	×	阿 Ib
41	〃	第42号住居跡	B－3－a	4.1×3.5	11 (4)	×	阿 II
42	飯山満東	第30号址	A－2－a	6.7×4.8	38 (2)	×	阿 III
43	〃	第31号址	B－2－a	4.2×3.5	10 (2)	×	阿 III
44	蕨立	第14号住居址	A－1－a	径3.5	2 (1)	×	阿 Ib
45	〃	第18号住居址	A－1－a	3.5×3.2	4 (1)	×	阿 II
46	〃	第21号住居址	B－1－a	3.0×3.0	8 (1)	×	阿 Ib ～ II
47	〃	第17号住居址	A－2－a	径3.0	6 (2)	×	阿 Ib ～ II
48	〃	第25号住居址	A－2－a	3.4×3.1	2 (2)	×	不明
49	〃	第26号住居址	A－2－a	3.6×2.9	10 (3)	×	阿 II

第6図　住居跡集成図(5)



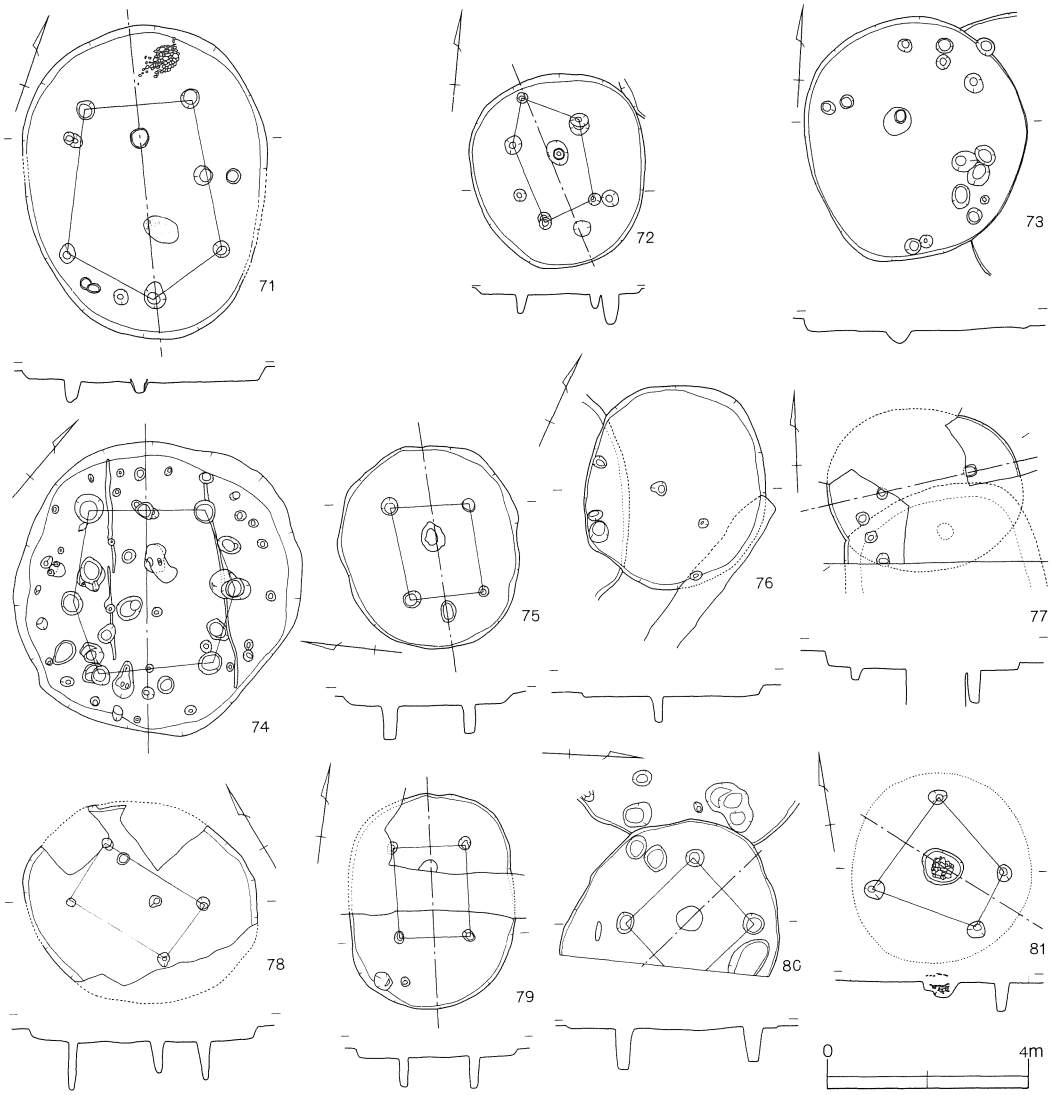
図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
50	蕨立	第45号住居址	A－2－a	径2.8	9 (3)	×	不明
51	〃	第2号住居址	B－2－a	4.0×2.2	4 (3)	×	阿 II
52	〃	第9号住居址	B－2－a	4.2×3.1	4 (2)	×	阿 Ib ～ II
53	〃	第15号住居址	B－2－a	5.0×4.0	15 (2)	×	阿 II ～ III
54	〃	第34号住居址	B－2－a	3.4×2.4	11 (2)	×	阿 II ～ III
55	〃	第47号住居址	B－2－a	4.0×3.3	3 (3)	×	阿 Ib ～ II
56	〃	第52号住居址	A－3－a	径3.5	11 (4)	×	不明
57	〃	第20号住居址	B－3－b	3.9×3.1	18 (4)	地	阿 II
58	〃	第19号住居址	B－4－b	3.2×2.8	8 (?)	地	阿 II ～ III

第7図　住居址集成図(6)



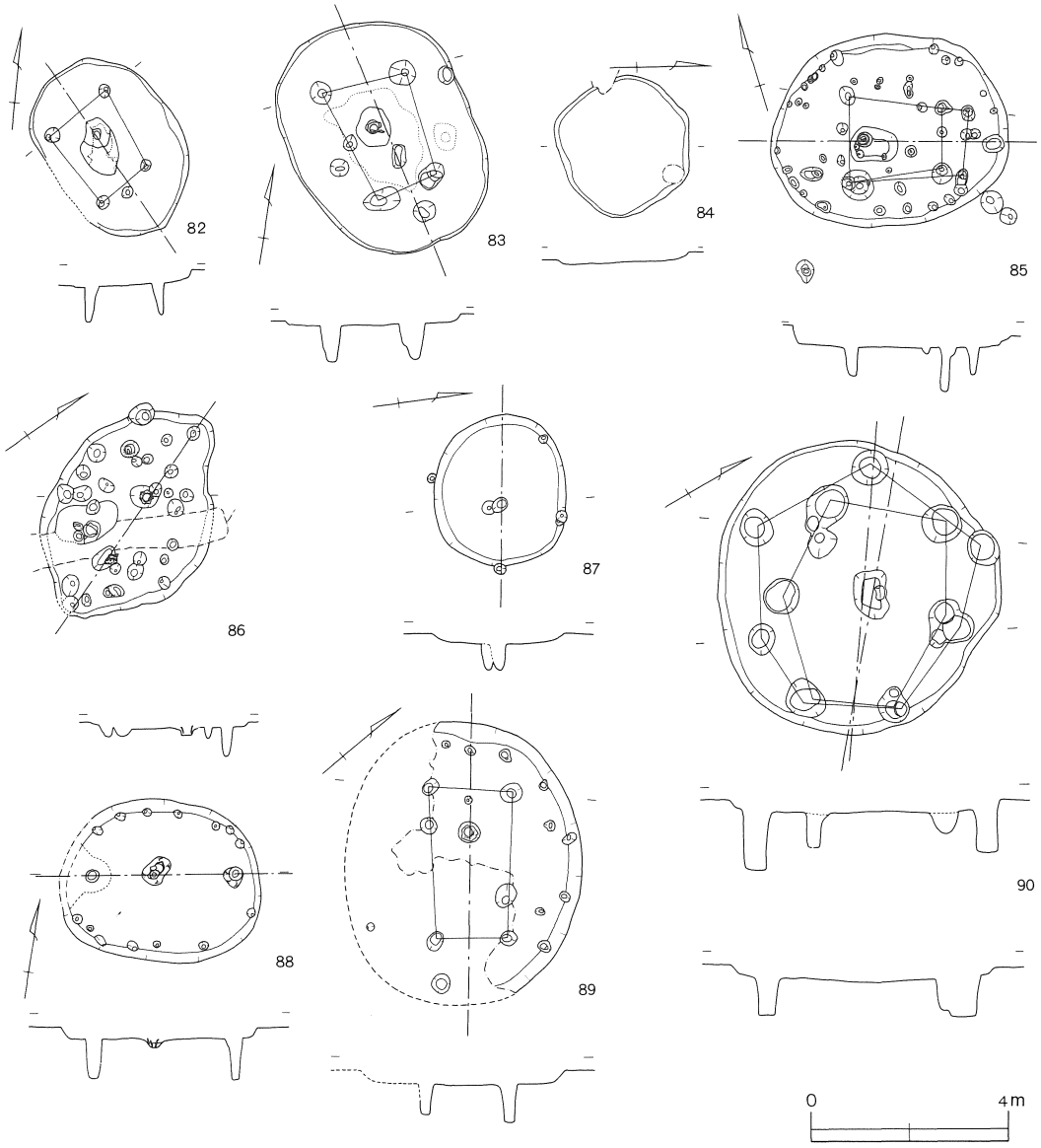
図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
59	草刈	62（059）号跡	A－1－a	径3.3	1（1）	×	阿 Ib
60	〃	50（049）号跡	A－4－a	径3.3	――	×	阿 Ib
61	〃	54（053）号跡	A－4－a	径3.3	――	×	阿 Ib
62	下加	第5号住居跡	A－3－b	3.9×3.75	14（4）	地	阿 II
63	秩父山	第16号住居跡	A－4－a	4.0×2.8	2（？）	×	阿 II
64	〃	第17C号住居跡	A－4－a	2.90×2.15	2（？）	×	阿 II
65	〃	第25号住居跡	A－4－a	4.5×3.35	5（？）	×	阿 II
66	〃	第26号住居跡	A－4－a	3.0×？	1（？）	×	阿 II
67	〃	第33号住居跡	A－4－a	3.1×3.0	3（？）	×	阿 II
68	池田	9号住居跡	A－1－a	径3.1	7（1）	×	阿 II
69	〃	8号住居跡	A－3－a？	4.5×3.4	14（4）	―	阿 Ib ～ II
70	亀居	1号住居跡	A－3－b	6.95×4.45	12（6）	埋	狢沢・阿 Ib

第8図　住居跡集成図(7)



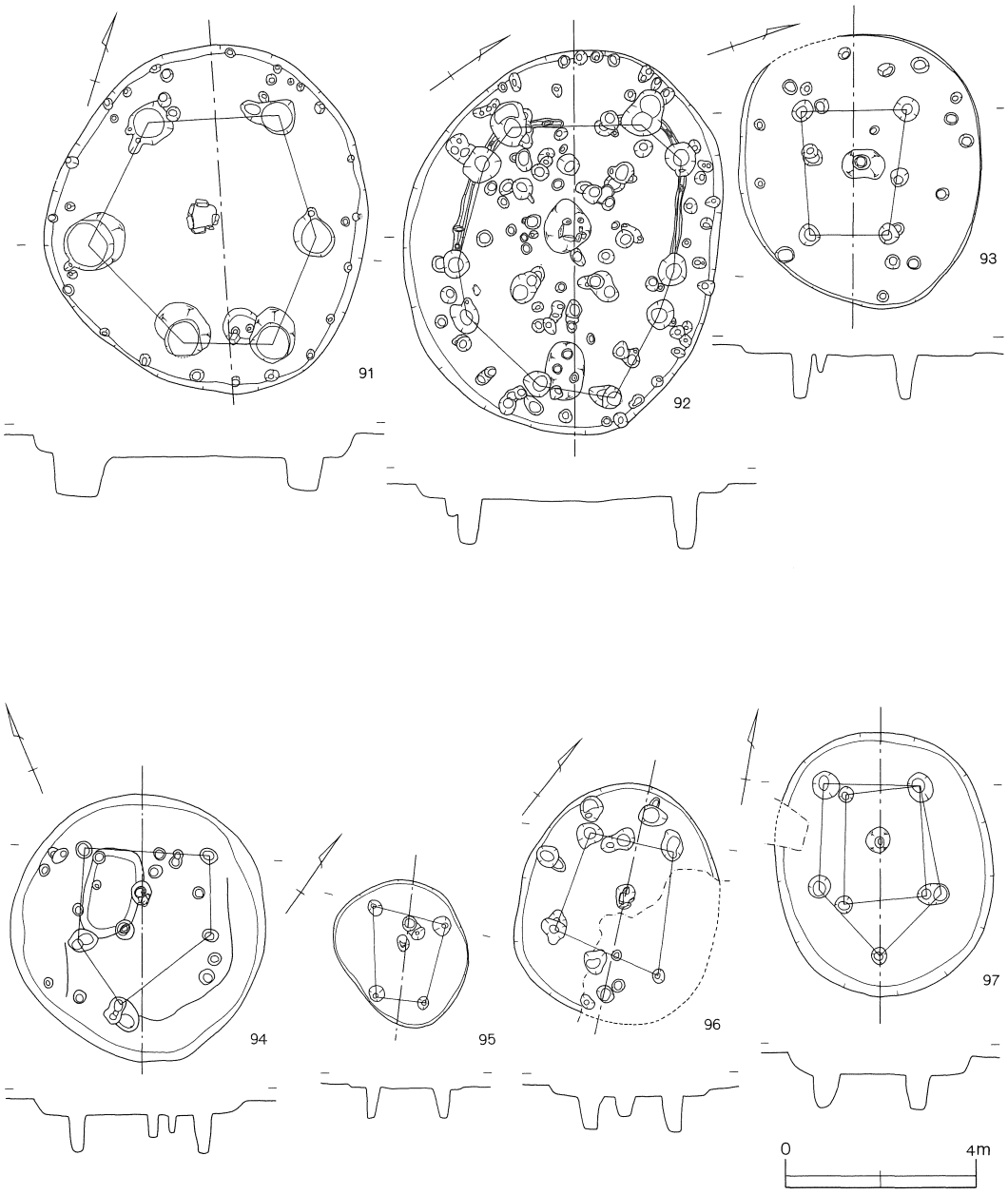
図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
71	膳棚	第1号住居址	A－3－b	6.18×4.85	12 (5)	埋	新道
72	〃	第13号住居址	A－3－b	5.78×3.48	8 (5)	埋	阿II
73	〃	第30号住居址	A－4－b	4.76×4.44	14 (?)	埋	阿II
74	白旗塚	第1号住居址	A－3－b	5.90×5.40	50 (6)	地	新道・藤内
75	〃	第2号住居址	A－3－b	4.10×3.60	5 (5)	地	新道
76	動坂	6号住居址	A－1－a	3.5×3.2	3 (1)	×	阿
77	〃	9号住居址	A－2－a	(径3.70)	4 (2)	—	不明
78	〃	3号住居址	A－3－a	4.7×4.0	6 (4)	×	阿II
79	〃	11号住居址	A－3－b	4.2×3.3	6 (4)	地	阿II
80	貫井南	10号住居址	A－3－b	?×4.42	6 (4)	地	新道
81	〃	16号住居址	A－3－b	(3.85×3.60)	4 (4)	焼石	藤内・阿II

第9図　住居跡集成図(8)



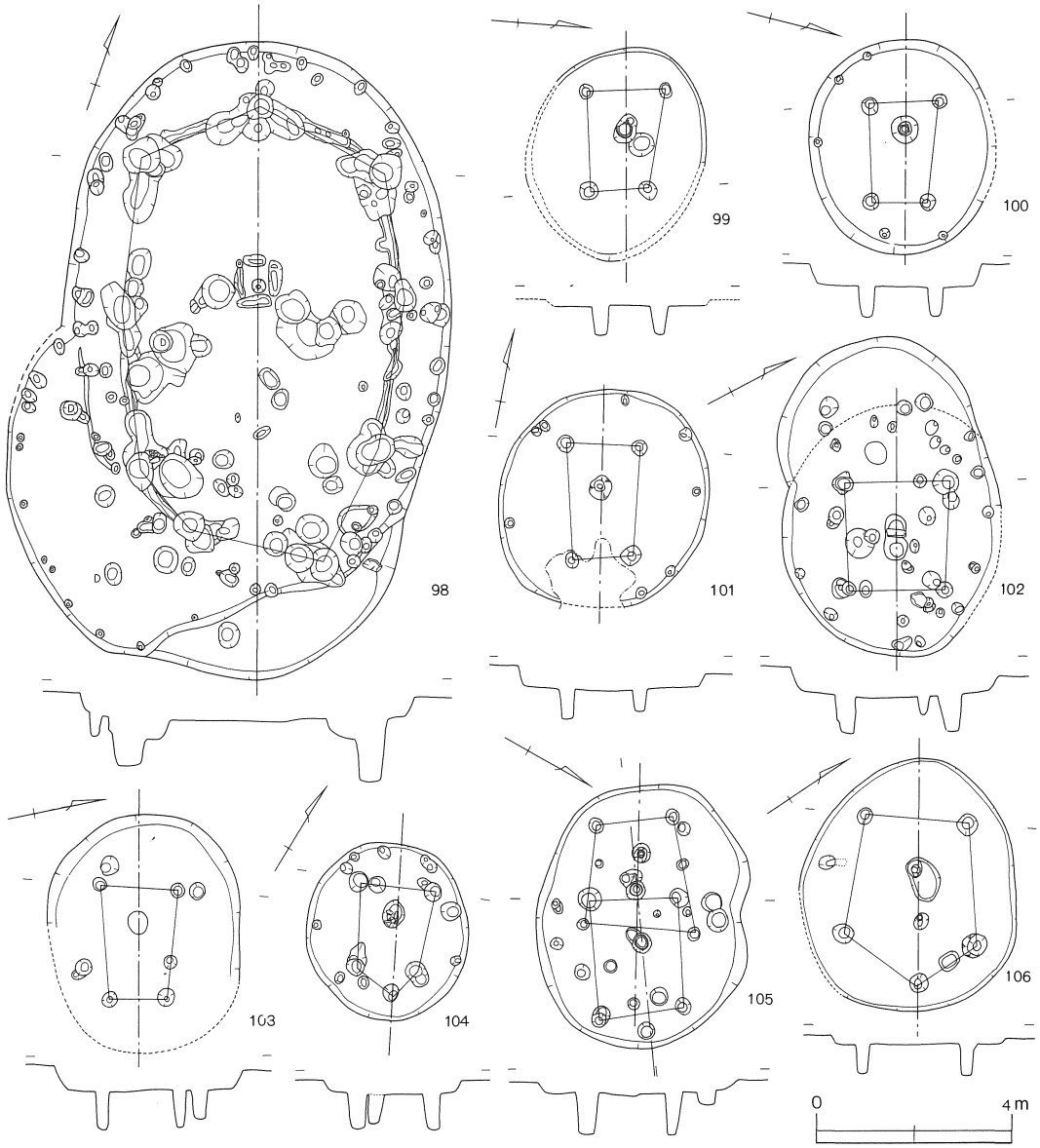
図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
82	木曽中学校	1号住居址	A－3－b	(3.7×2.8)	5 (4)	地	狢沢・阿Ib
83	〃	3号住居址	A－3－b	5.0×3.9	9 (4)	埋	阿Ib
84	〃	2号住居址	A－4－a	2.8×2.6	――	×	狢沢
85	藤の台	4号住居址	A－3－b	4.90×3.85	45 (4)	埋	狢沢
86	〃	3号住居址	A－4－b	4.85×3.4	31 (?)	埋	狢沢
87	神谷原	住居SB180	A－1－a	3.0×2.7	7 (1)	×	不明
88	〃	住居SB178	A－2－b	4.0×3.3	16 (2)	埋	狢沢
89	〃	住居SB10	A－3－b	(5.7×4.8)	18 (4)	埋	狢沢
90	〃	住居SB11	A－3－b	径5.8	13 (6・7)	石	新道

第10図　住居跡集成図(9)



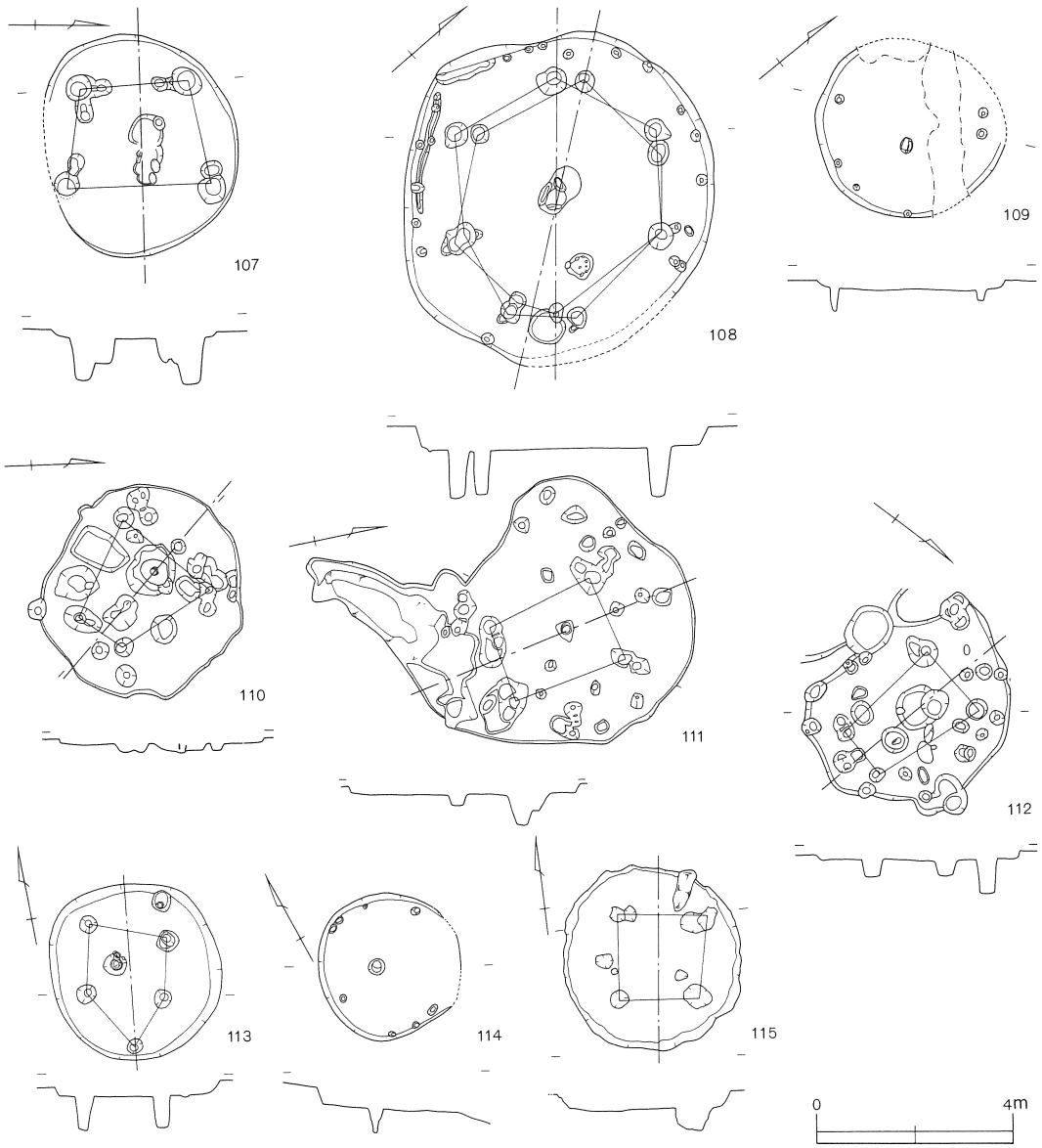
図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
91	神谷原	住居SB66	A－3－b	7.6×6.8	37 (6)	石	新道
92	〃	住居SB109A	A－3－b	7.8×6.5	115 (10)	石	新道
93	〃	住居SB112	A－3－b	5.5×5.1	25 (4)	埋	狭沢
94	〃	住居SB122	A－3－b	5.3×5.2	21 (5)	埋	狭沢
95	〃	住居SB123	A－3－b	3.0×2.5	6 (4)	埋	新道
96	〃	住居SB141	A－3－b	5.0×4.7	17 (4)	石・埋	新道
97	〃	住居SB144	A－3－b	5.5×4.5	8 (4・5)	地	新道

第11図　住居跡集成図(10)



図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
98	神谷原	住居SB145B	A－3－b	8.9×6.4	―（9）	石?地	新道
99	〃	住居S B 147	A－3－b	4.3×3.6	5（4）	埋	狢沢
100	〃	住居S B 148	A－3－b	4.3×3.8	9（4）	埋	狢沢
101	〃	住居 150	A－3－b	4.3×4.2	12（4）	埋？	狢沢
102	〃	住居SB151A	A－3－b	4.9×4.3	41（4）	地	新道
103	〃	住居SB151B	A－3－b	4.8×4.0	9（4）	地	狢沢
104	〃	住居S B 152	A－3－b	3.6×3.4	19（5）	焼石	新道
105	〃	住居SB155A.B	A－3－b	5.4×4.2	24（各4）	埋	狢沢
106	〃	住居S B 160	A－3－b	5.1×4.4	8（5）	地•埋	狢沢

第12図　住居跡集成図(11)



図版No.	遺跡名	遺構名	形態	規模	ピット数(主柱穴)	炉	時期
107	神谷原	住居SB165	A－3－b	4.4×3.9	9 (4)	石?	新道
108	〃	住居SB181	A－3－b	6.5×6.4	37 (7)	石?	新道
109	〃	住居SB182	A－4－b	3.8×3.5	6 (?)	埋	狢沢
110	当麻	第33号竪穴住居址	A－3－b	4.3×3.5	21 (4)	埋	阿Ib
111	〃	第48号竪穴住居址	A－3－b	8.0×5.3	30 (4)	埋	阿Ib
112	〃	第61号竪穴住居址	A－3－b	4.4×3.3	27 (4)	地	阿?
113	荏田第10	7号住居址	A－1－a	径2.9	9 (1)	×	新道
115	三原田	8－20住居	A－3－a	4.9×4.8	9 (4)	×	阿II

第13図　住居跡集成図(12)

報文に拠ると3軒の阿玉台式期の住居跡が検出されているが本稿では第30、31号住のみ取り上げた。第30号住居跡は該期のものとしては大形で長軸が6.7mを計る。住居形態はA－2－a型である。第31号住居跡は前者に比して小形でやや長方形に近いプランを呈するB－2－a型である。2軒とも伴出遺物から考えて阿玉台II～III式期の所産と考えられる。占地についてであるが、斜面上に位置しているも考えられる。

⑫蕨立遺跡（第6図―44～―49、第7図50～58）

16軒の該期住居跡が検出され、阿玉台Ⅰb～III式期に渡っている。1－a型のものに円形プランを主体とし第14、18、21、25号住居跡があげられる、内第25号住居跡については遺物記載がないため不明であるが、他は大略阿玉台Ⅰb～II式期のものと考えられよう。長軸上、あるいは直線的に複数の主柱穴を配する2－a型は円形、楕円形、長方形プランが認められる。A－2－a型には第17、26、45号住居跡、B－2－a型には第2、9、1～、34、47号住居跡があり、伴出遺特から阿玉台Ⅰb～III式期のものと考えられる。第52号住居跡は4本主柱のA－3－a型と思われるが、該期に入れられるかどうか疑問が残る。

東関東では阿玉台式土器を伴出する住居跡には炉が検出されない例が一般的であるが、本遺跡では2軒の該期住居跡が炉を伴っている。柱穴を規則的に配するB－3－b型には第20号住居跡があり、4本主柱と考えられる。主柱配置が不明確なものに第19号住居跡があるがこれはB－4－b型とすることができよう。炉は地床炉である。これらの住居跡は伴出遺物から見て他形態と共存すると考えられ、炉の有無が何に由来するか興味深い。

⑬草刈遺跡（第8図―59～61）

本遺跡では3軒の阿玉台Ⅰb式期の住居跡が検出されている。内2軒は主柱穴を持たないA－4－a型、1軒がA－1－aである。これらの住居跡は南側に位置する草刈貝塚における集落の一部と考えられ、集落外縁部に占地した一群と思われる。

埼玉県

本県の該期遺跡は6遺跡を数えるが、遺跡単位の検出軒数は少い。千葉県との関連が充分に考えられるが、大河川等の要因がそれを打ち消していると思われる。

⑭下加遺跡（第8図―62）

本遺跡では該期住居が1軒検出されている。第5号住居跡は、ほぼ、中央に地床炉を有し、4箇所に主柱穴を配するA－3－b型である。伴出伴物は以前より、勝坂、阿玉台の両型式の共伴関係について論ずる上で重要な資料であった。阿玉台II式土器と思われ、やや勝坂的な変化を見せているものも認められる。

⑮秩父山遺跡（第8図―63～67）

4軒の該期住居跡が検出されている、形態は不明確な部分が多いため、一括してA－4－a型の類型とした。伴出遺物はII式が主体の様である。報告者はこれら4軒が直線的にならぶという点を指摘し、何らかの占地規制の存在を想定している。

⑯池田遺跡（第8図―68～69）

本遺跡では阿玉台式期の住居跡が2軒、勝坂式と阿玉台式を共伴するものが2軒検出されている

が、後者についてはプランその他が不明確なため除いた。8号住居跡は中央を土壙と切られているため、炉の有無が不明確であるが、A－3－a型としておく。9号住居跡は報文によれば中央付近の2つのピットが主柱穴とされている。A－2－a型の類型と考えられよう。2軒とも伴出遺物に乏しいが、阿玉台Ⅰb～Ⅱ式土器を出土している。集落における位置は北西から南東に孤状に分布する住居群の南端に占地しており、集落外縁とすることができよう。

⑰亀居遺跡（第8図―70）

該期、阿玉台Ⅰb式土器を共伴する狢沢式期の住居跡が1軒検出されている。形態はA－3－b型で埋没土器炉を伴う。6本主柱でやや長棟である。報文によれば、台地絡辺より130m入り込んだ地点で検出されている。

⑱膳柵遺跡（第9図―71～73）

3軒の新道、阿玉台式期の住居跡が検出されている。第1、13、30号住居跡がそれで前2者をA－3－b、後者をA－4－b型とした。いずれも埋設土器炉を伴う。膳柵遺跡は調査が部分的であるため、各期の遺構分布の様相が明確ではない。上記の住居跡も他の時期のものと混在する様で、占地に関しては即断を避ける。

⑲白旗塚遺跡（第9図―74～75）

本遺跡からは該期住居跡が2軒検出されており、第1号住居跡は阿玉台Ⅱ式土器を伴っている。住居形態は両者ともA－3－b型で炉は地床炉である。第1号住居跡出土のⅡ式土器は膳柵13号住居跡、第5号住居跡のものと類似する。やや勝坂式的に変容したものと言えよう。

東京都

東京都内の諦期住居跡は知見に触れたもので5遺跡を数える。中でも神谷原遺跡は乏しい該期集落資料の中でもその様相を明確にする上で貴重なものとなろう。

⑳動坂遺跡（第9図―76～79）

2軒の阿玉台式土器を伴う住居跡と類似するものが他に2軒ある。A－1－a型には6号住居跡がある。本跡は隣接する井戸尻式期の5号住居跡を切っているため、本形態としては最も新しい段階のものと考えられる(註5)。A－2－a型と考えられるのが9号住居跡であるが、地下室による攪乱が激しいため断定はできない。A－3－a型には3号住居跡がある。本跡は4箇所に主柱穴を配する他、中央にもやや深いピットが存在する。炉を有するものとしてはA－3－b型の11号住居跡がある。4本主柱で中央やや北側に地床炉を配する。これら2軒は阿玉台Ⅱ式を伴っている。

本遺跡では上記住居跡に限らず、勝坂、阿玉台の量的関係は後者が上回っている。報告者もそれを指摘し、武蔵野台地における本遺跡の特異性を認めている（安孫子1973）。

㉑貫井南遺跡（第9図―80～81）

本遺跡では新道式期のもの1軒、及び阿玉台Ⅱ式土器を伴う藤内式期の住居跡1軒が検出されている。住居形態はA－3－b型で2軒とも4本主柱と考えられ、基本的形態を呈している。炉は地床炉と焼石炉である。

㉒木曽中学校遺跡（第10図―82～84）

3軒の貉沢、阿玉台Ⅰb式期の住居跡が検出されており、土器も良好な資料が出土している。住居

形態はA－3－b、A－4－a型で炉は埋設土器炉、地床炉がある。中でも第3号住居跡は本来的な阿玉台Ⅰb式土器を炉に埋設しているという点で異色である。また、住居跡は緩斜面上に位置する。

㉓藤の台遺跡（第10図―85～86）

藤の台遺跡では狢沢式期の住居跡が2軒調査されている。住居形態はA－3－b、A－4－b型で、双方ともに埋設土器炉を伴う。前述の木曽中学校遺跡例に比して阿玉台式土器の出土は少なめである。また、住居跡は斜面上に分散して占地している。報文によれば、調査面積の割合から考えて該期の集落はこの2軒で完結するとしている（桐生他1980）。

㉔神谷原遺跡（第10図―87～90、第11図―91～97、第12図―98～106、第13図―107～109）

本遺跡では五領ヶ台から藤内式期に渡る集落跡が検出され、該期資料の充実に大きく寄与した。本稿ではこの内、狢沢から新道式期にかけての住居跡群を対象としている。住居形態はA－3－b型を主体とするが、主柱本数及び規模にバラエティがある。他にA－1－a、A－2－b型が認められる。炉は埋設土器炉が一般的で地床炉、小規模な石囲炉がこれに次ぐ。また、新道式期には大形住居と長方形柱穴列を併う。各期における占地については同心円状に分布し、狢沢式期以降、強い規制が感じられる。

神奈川県

本県では3遺跡を取り上げた。資料数に乏しいが、地形上周辺地域との関連が強いと考えられ、今後の資料増加が期待される。

㉕当麻遺跡（第13図―110～112）

3軒の阿玉台式期の住居跡が検出されている(註6)プランはやや不整であるがA－3－b型の類型として良いと思われる。炉には埋設土器炉と地床炉があるが、埋設土器には阿玉台Ⅰb式土器を使用するなど前出の木曽中学校遺跡例に類似する点も認められる。(註7)これら3軒の集落内における占地については報文中、次の様に述べられている。「第1期の阿玉台式及び勝坂直前型式は集落からみた場合、環状の内側に多い。即ちこの段階では環状ないし馬蹄形に形成しようとする気配が全くない。ただ留意することは竪穴住居の配置が西側に看取されている点である。」（白石他1977）このあり方は前述の神谷原遺跡の該期の集落、また子和清水貝塚における様相とは異なる。

㉖荏田第10遺跡（第13図―113）

本遺跡では新道式期の住居跡が1軒検出されている。住居形態は埋設土器炉を伴うA－3－b型である。斜面をかなりの範囲で渡って調査されているが該期のものはこの第7号住居跡のみである。(註8)該期集落の規模、占地の問題からも興味深い。

㉗井土尻遺跡（第13図―114）

荏田第10遺跡と同様、新道式期の住居跡が1軒検出されている。斜面上に構築されているため、東側が流れているが、中央に主柱穴を有するA－1－a型である。今までに見てきた伴出遺物と住居形態の組み合せから逸脱した例といえよう。

群馬県

本県では利根川流域に阿玉台式期の集落の存在が予期される。しかし、今回の知見に触れたのは

１遺跡のみである。

㉘三原田遺跡（第13図―115）

報告は住居篇のみ刊行済みのため、時期については「三原田遺跡資料合冊」（赤山、能登1977）に拠った。該期のものは阿玉台Ⅱ式土器を伴う８区20号住居跡１軒で、住居形態はＡ―３―ａ型である。報告者に拠れば三原田遺跡全体において「概して阿玉台式土器にその系統が求められる土器が出土しており、勝坂式土器は少ない。また最近では、県内においても利根川本流域とその支流域で阿玉台式土器の分布が多く見られることが判明しており、長野県中信地域にも若干の分布が見られるなど阿玉台式土器と利根川との関連がさらに強調されることとなった。」（能登1977）とあり、今後の資料増加が待たれる。

以上、やや冗長であったが各遺跡について概略的に述べてみた。ここで各形態の分布傾向をまとめておきたい。

東関東においては阿玉台Ⅰｂ～Ⅱ式段階まで１―ａ、２―ａ、３―ａ型が主体を占める。炉をもつ３―ｂ型はⅢ式段階から出始める様である。西関東では古い段階より３―ｂ型が一般的で新道式期から規模の大小にバラエティが出てくる。炉は埋設土器が大勢を占める。また、極稀にＡ―１―ａ型も見られる。これらの分布傾向が何に由来するかについては後述することとする。

４　上屋構造の推定

縄文時代の竪穴住居跡の復元は多くの史跡、博物館等でなされ見学者の目を楽しませ、当時の生活を最も解り易くする資料となっている。反面、実証を重んずる考古学界では確証のない復元案を疑問視する研究者も多いということも否定できない事実である。

こうした学界の傾向の中で住居平面の規格性や構築過程、上屋構造に関する優れた論文もいくつか発表されている。平面の規格性から構築過程を論じたものに神村透の論攻がある（神村1980）。神村は下伊那地方の縄文時代中期後半の住居群の斉一性に注目し、平面構成の決定手順について大略次の様に述べている。⑴中心を決め、綱を使用して規模、プランを大まかに決定する。⑵中心を通る主軸線を引き、入口等を決める。⑶中心を通り主軸線に直交する線を引く。⑷⑶と主軸線を基に一定の角度に振って柱穴を配置する。以上の過程で注目すべき点は神村が主軸と呼称している線を住居構築の段階より意識されていた生活の方向としているということである。これは坪井清足が住居の主軸と出入りの方向と一致させた方法や加藤緑の「外界から出入口を通して非生活空間を結ぶ」線が主軸とした概念と同一基盤にある考え方と言えよう（坪井1967、加藤1975）。

神村らの概念に対して橋本正は住居跡をほぼ相似形に二分する線を主軸とし、これを棟木が平面に投影された線として設定している。（橋本1976）。この考えを「竪穴住居の全てに共通して認められる主軸を持つ平面構造」から「全竪穴住居に共通の上屋構造」が求められるという解釈に発展させている。すなわち氏の考え方は生活の方向性を主軸とせず、上屋構造に由来する主軸を設定しているのである。同じ様な方法に金子直行のものがある。

金子は大山遺跡群を分布する際、主軸を「配置する柱穴間を理想的に左右二分割する中心線とし

ている。(金子1982)これは住居構築の際の叉首構造から考えて橋本の言う棟木のラインと一致するものと思われる。また、氏は住居形態と土器型式を有機的に結びつけ、大山遺跡の構造の解明を試みている。三原田遺跡の方法と通ずるところもあり、注目すべき試論といえよう。

渋谷文雄は建築学の立場から子和清水貝塚の住居群について分析を加えている(渋谷1982)。渋谷の方法は住居規模と主柱穴数、位置との関連を重視し一種の規格「放射線形基準格子」を類型化により見出した。この規格内の放射線は柱穴の配置位置の方向を示しているが、これは叉首構造の一部が垂直投影されたものとしている。概念としては神村の方法と同一のものと言えようが、構築過程の中ではまったく逆の手順を踏んでいる。すなわち渋谷の考えでは叉首の一部を作った後、壁穴掘削を行ない、叉首にあわせて柱穴の位置を決定するもので、叉首材の長さが住居規模柱穴位置を決めると結論している。住居の構築過程を従来とは、やや視点を変えて論じているという点で注目すべき論文であろう。

筆者が本稿で試みた復元案は主として橋本の方法に拠っている。橋本の平面形態、それに現れる主軸と上屋構造の不離の関係が縄文中期前半の住居群跡を対象としても充分妥当性を有すると考えるためである(註9)。

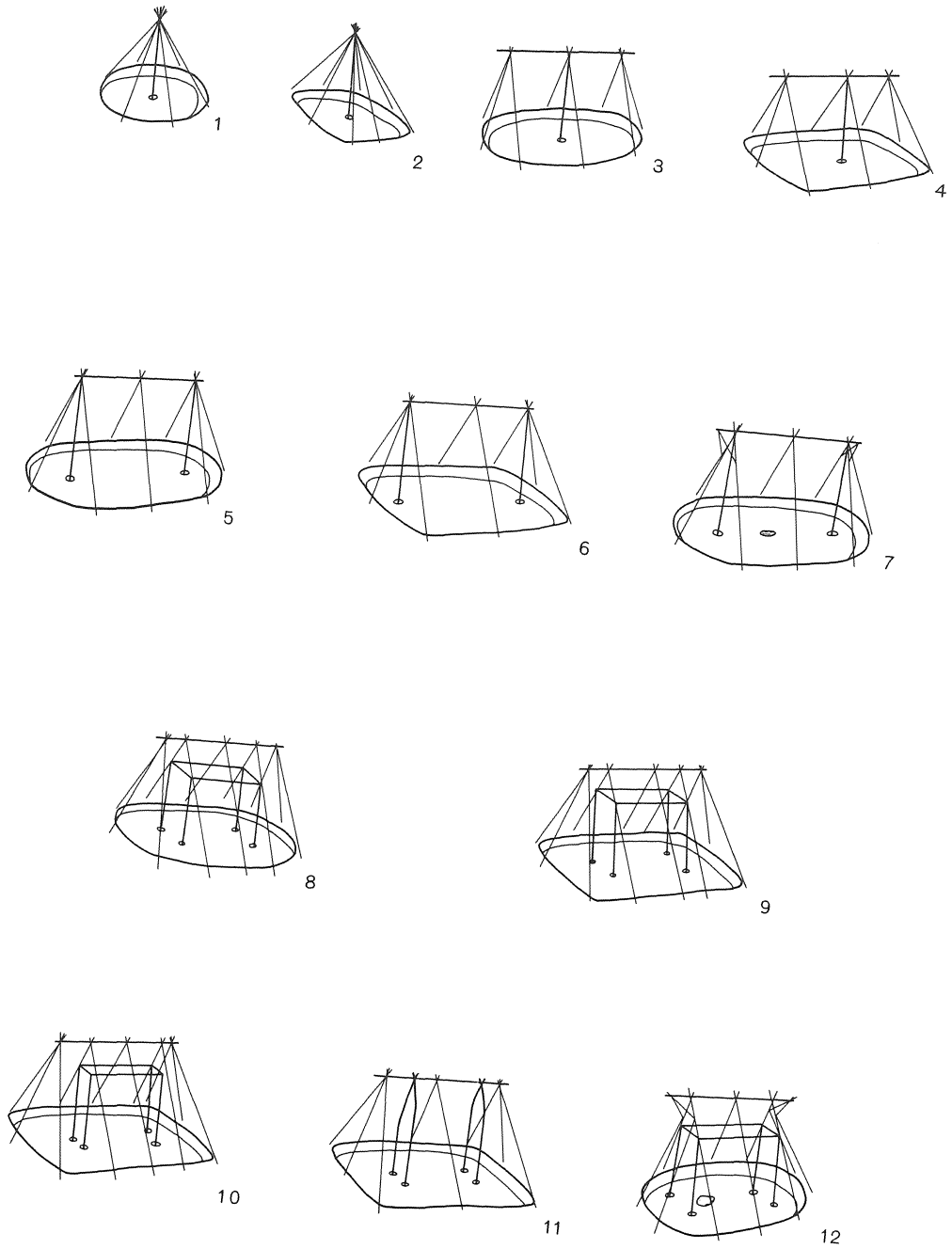
以下、平面形態別に検討してゆくこととする。

A－1－a、B－1－a型の上屋構造は共通点が多いが、平面形別に分類する必要性がある。円形、方形のものは長軸をもたないため、2つの案が想定できる。(第14図1、2、3、4)1と2は中央に1本の主柱を立て、それを中心として垂木をかけて頂部を結束する錐形の寄棟造りで最も単純な構造を示した。3、4は中央の主柱を棟持ち柱としたもので妻側は叉首で支えている。この方法の長所は1、2に比して内部空間が広めにとれ、構造的にも強度が高くなると思われる。造りは寄棟としておいたが入母屋造りとすることも可能である(註10)。楕円形、長方形プランで長棟となるものについては3、4のみが該当しよう。叉首による支えが多くなるだけで他に差異はかい。これらの範疇に入るのはA－1－a、B－1－a型とした茨城県下広岡28号住居跡、千葉県子和清水33、96、111、117、252、156号住居跡等があり、他に東京都、神奈川県でも検出されており、分布範囲は関東地方南部全域に広がると思われる。

A－2－a、B－2－a型は前述の棟持ち柱方式としたものに準じたものと考えることができる。棟持柱は2本以上となる(第14図5、6)。構造としては1－a型の内部空間を拡長した発展型とも見ることができるが、上屋の系統も同じものと思われ、時期的にも同一のものが多い。類例として子和清水1、90、92、139号住居跡、高根木戸第72号住居跡などがあり、分布範囲も1－a型と同じ様である。

A－2－b型の上屋は2－a型と同じであるが、棟持ち柱は原則として2本となり、2本間に炉を伴う。したがって入母屋造りの上屋を持つと思われる。事例としてはA－2－b型の神谷原SB178のみである。住居形態と炉の関係が興味深い(第14図7)。

A－3－a、B－3－a型は主に阿玉台式を伴うものが多く、分布範囲もほぼ関東地方全域に広がる。主柱本数は原則として4本でそれに梁と桁を渡し架構した後、斜めに立てかけた垂木による叉首で棟木を支持したと思われる。寄棟、入母屋の両方が考えられるが、炉を持たないという点か



第14図　上屋構造復元案模式図

ら前者をとりたい（第14図８、９）。

３－ａ型の類型の中で特異なものを３′－ａ型とした。４本柱という点は同じであるが、梁間が非常にせまい。この類型の上屋には２つの案を呈示しておく（第14図10、11）。10は８、９と同一の構造とし、11は対応する２本の支柱を頂部で結束し、棟持ち柱としたものでである。この構造は前記の２－ａ型に通ずるものがあり、より強度を持たせようとしたものか、あるいは発展型と考えることができよう。筆者はその合理性から11の案の方が可能性が高いと考える。

Ａ－３－ａ、Ｂ－３－ａ型の類例は石関第１号住居跡、石神Ｉ区２号住居跡、三原田遺跡８区20号住居跡などがあり、分布範囲から、阿玉台式土器を伴う住居跡としては関東地方において最も一般的なものと言えるかもしれない（註11）。Ａ－３′－ａ、Ｂ－３′－ａ型の事例は子和清水貝塚160号住居跡、中山新田II遺跡015住居跡などがあるが、Ａ－３－ａ、Ｂ－３－ａに比較すると類例は少ない。

Ａ－３－ｂ型は我々が縄文時代中期の住居跡といった時、最もよくイメージが浮ぶ住居形態と言えよう。西関東では早くから一般的で東関東でも勝坂系土器の影響が強まるにつれて他の形態を圧倒してゆくことになる。構架、小屋組の基本形は３－ａ型と同様であるが、実際とは規模や主柱本数にバラエティがあるため、それぞれに応じた方法がとられたと思われる（註12）。また造りは炉との関係から入母造りと考えられる（第14図12）。３－ｂ型に伴う炉は神谷原遺跡例を見ても埋設土器炉が圧倒的に多く、一部に地床炉、石囲炉がある（註13）。Ａ－３－ｂ型の類例は、神谷原、亀居、膳棚、白旗塚遺跡にあり、前述した通り西関東において主体的である。

図化していないが、他に無柱穴のものや柱穴の配置が不規則な４類がある。後者については遺構内のピットのいずれかが主柱穴となると思われる。前者は「交叉首組と垂木のみで構築」されたと思われる（ドメーニグ1984）。また橋本は「主柱穴が検出されないことを理由にその遺構が住居でないと結論づけることはできない」とし分類上無主柱穴式を設定する必要性を説いている。今回、呈示した資料の中には報文において「竪穴状遺構」と呼称されているものも含まれており、これらがこの範疇に入るものと考えられる。

以上、各形態について平面構造の在り方から上屋構造の推定を試みた。ここで平面形の時間的変遷について若干触れておく。

Ａ－１－ａ、Ｂ－１－ａ型は阿玉台Ｉｂ～II式期に多く、やや古い段階に主に検出される。また神奈川県では新道式を伴うものも見られる。この平面形に採用した錐形、あるいは棟木を持つ寄棟構造は伴出土器から見ても古式の様相を呈していると考える。同時期に西関東ではＡ－２－ｂ、Ａ－３－ｂ型がすでに確立し、東関東とは好対称を示す。Ａ－２－ａ、Ｂ－２－ａ型は１－ａ型と共存、あるいは後出的で阿玉台II式期に類例が多い。Ａ－３－ａ、Ｂ－３－ａ型は阿玉台II～III式を伴うものが多く、２－ａ型と共存あるいは後出的である。また３′－ａ型もほぼ時時期と思われ上屋推定案の11を採れば２－ａ型と共存している可能性も高くなる。西関東ではこの間、３－ｂ型を継続して継持するが阿玉台III式期になると東関東でも題例が出てくる。いずれにしても、阿玉台式土器を伴う住居跡の特殊性は阿玉台III式段階で失われ始め、中期末に柄鏡型住居跡が出現するまでＡ－３－ｂ、Ｂ－３－ｂ型の独壇場となる。

以上、時間的変遷について述べてみた。しかし、ここで問題となるのは土器型式に代表される地域性がはたして上屋構築技術をも限定し得るものだろうか。

この点については橋本正が前掲の論文中で次のように述べている「住居は地域に根ざす伝統性と他地域から移入した新方式の統合化によって作られる場合が多い。」とすれば関東地方における中期の相様はまさにこの考えを認証する好例となりはしまいか。

また関根康正は「住居形態を考えるとき、環境から強い影響はたしかに存在する。たとえば自然環境、そしてその上に成り立つ生業形態や社会組織、またより直接的には利用可能な建築材料や技術といった条件など、当然ながら住居のありようとかかわりをもつことになる。」としている（関根1984）。土器型式の相異が上記の諸要素の違いを示しているものならば、土器型式の相異が上屋の構築技術の違いを間接的に表わしていると考えても良いと思われる。それぞれの文化、環境の中で生活する過程で家のイメージは固定化し、新しい技術の流入によって取捨選択が行なわれ、イメージの変化が起こると結論しておきたい。

5　空間的分布と問題点

前節までの記述中、使用した東関東及び西関東という用部は表現として若干曖昧であった。本節では東関東を茨城、栃木、千葉、西関東を埼玉、東京、神奈川、群馬に大別し、該期集落跡の分布、立地状況について述べてゆくこととする（第14図）。

東関東

栃木県

本県は地形的には三方を山地で囲まれ、それを源とする鬼怒川、箒川、那珂川等、多くの河川が流れている。それらは利根川方向に開く様に扇状地を形成している。栃木県は以前より阿玉台式土器の出土が多い県として知られるが、阿玉台Ⅰb～Ⅱ式段階のものとは思ったより類例が少なく、主として大木8a式土器に伴うⅢ～Ⅳ式が多い様である。県央を南北に流れる鬼怒川は利根川と合流するため、その水系との関連が考えられ、また県北部においては那珂川を介在した茨城県北部との交流が想定されるため、大木系土器の影響を強く受けながらも阿玉台式土器がその末期まで姿を残していることも納得できよう。

県内の遺跡であるが、本稿で取り上げたのは１、石関遺跡　２、石神遺跡である。前者は山地部突端の台地上に、後者は鬼怒川により形成された宝積寺台地に小支谷に臨む台地上に立地する。両者とも集落単位の調査ではないため数軒が検出されたのみである。

茨城県

本県は南部利根川下流域、霞ヶ浦周辺において阿玉台Ⅰb～Ⅱ式を出土する遺跡が濃密に分布している。ただしその多くが阿玉台式土器の編年研究が進む中で貝塚を主体とした調査が行われているため、住居跡検出例は少ない。

茨城県の地形は福島県や栃木県に源を発する河川が多数流れている。南部は前述の様に利根川が千葉県境を流れ、北側の霞ヶ浦とともに水郷地帯を形成している。県北部は山地により福島、栃木

の両県境が分かたれている。

阿玉台Ⅰb～Ⅱ式期の住居跡が検出された遺跡は少なく、知見に触れた遺跡は1遺跡のみである(註14)。3、下広岡遺跡は霞ヶ浦に注ぐ桜川流域の比較的平坦な筑波稲敷台土上に立地する。本遺跡では壁溝を有する該期住居跡が検出されている。

千葉県

千葉県は北部に利根川が流れ、その南予に下総台地の西側は様々な大小河川によって複雑な地形に開析されている。北部も利根川に注ぐ支流に、また東側も栗山川によって樹枝谷が形成されている。房総丘陵は東京湾岸で上記の地形が顕著である。

本県も茨城県と同様、研究史上著名な遺跡が多い。また該期の住居検出例も多く、知見に触れたものだけでも10遺跡を数える。それらの分布の中心は下総台地北西部に存在する様である。

4、5はそれぞれ中山新田Ⅱ遺跡、水砂遺跡で、利根川に開析された小支谷を臨む台地上に立地する。6、東平賀遺跡と7、子和清水貝塚は松戸市に所在する。松戸市の位置する下総台地北西部は北と南に大河川を配し、それらに注ぐ河川によって樹枝状支谷をなす。子和清水貝塚は該期集落の事例として東関東では代表的なものである。住居形態もバラエティに富み、時期も該期にとどまらず、中期末まで連続して営まれている。松戸市に隣接する鎌ヶ谷市は地形上、松戸市の延長上にあり、市内には手賀沼に注ぐ大津川や大和川の支流、谷地川が流れ、複雑な地形が形成されている。本市には8、9の西山、大堀込の両遺跡が位置する。西山遺跡はその一部が調査されたのみで、実体が不明確であるが、大堀込遺跡は西側に広がる双賀辺田遺跡の一部と考えられ、該期住居跡の分布状況は子和清水貝塚のそれに類似すると思われる。10、11は船橋市に所在する高根木戸、飯山満東遺跡である。両者とも船橋市内を流れる海老川に開析された小谷支を臨む台地上に立地しているが、前者は特に最奥部に近い所に位置している(註15)。

下総台地南部に位置する12、蕨立遺跡は県央を流れる都川の中流域、通称大道山支谷を臨む台地の西端に立地する。1979年から80年にかけて調査が行なわれた。該期集落の一部が良好な状態で検出された。子和清水貝塚とならぶ好資料といえよう。千葉市の南側に位置する市原市は下総台地の南端近くにある。本市には13、草刈遺跡が所在する。本遺跡は村田川に開析された樹枝状支谷の中村田川本流を臨む台地上に立地する。南側には草刈貝塚があり、本遺跡はその一部と思われる。

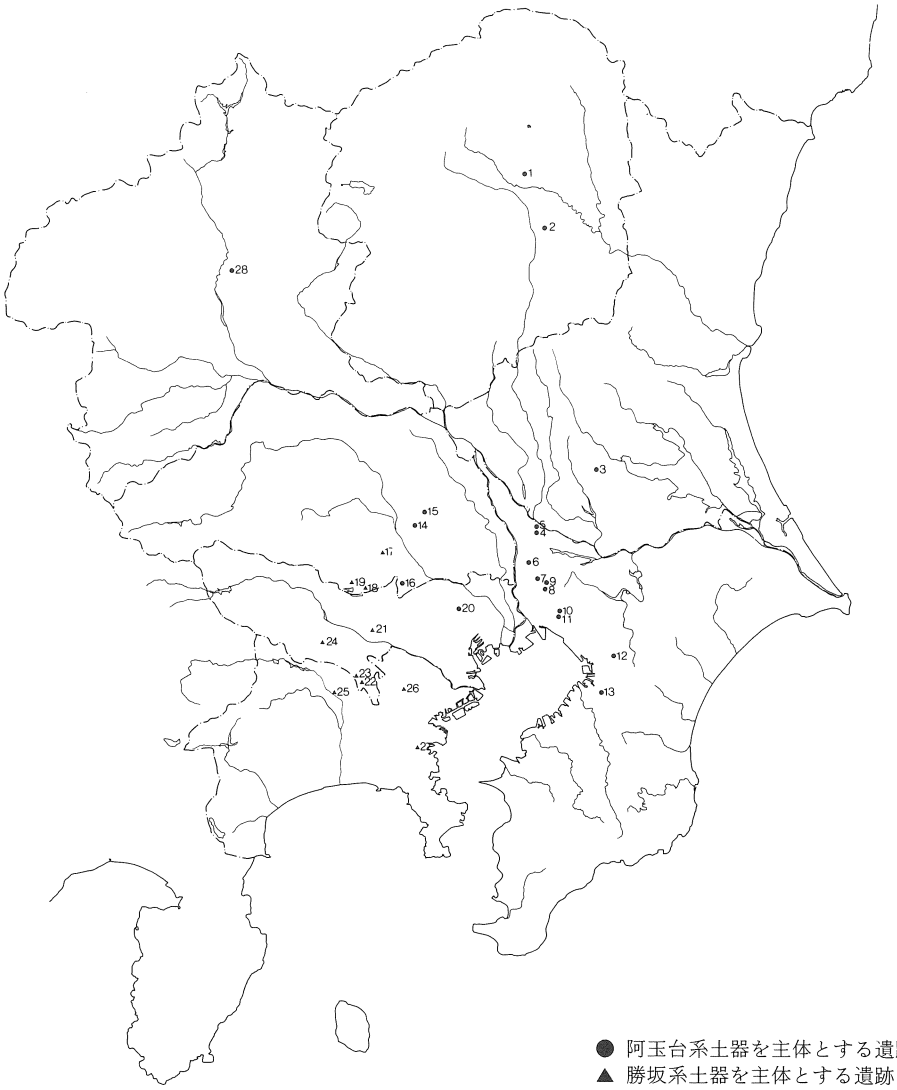
以上、千葉県検出例について、地形と立地の概略を述べたが、その様相から今後とも類例の増加が予想される。

西関東

埼玉県

本県は地形上、千葉県よりのびる下総台地、大河川に狭まれ孤立する大宮台地、東京方面に広がる武蔵野台地、西に秩父山地を有する。知見に触れた資料は大宮台地と武蔵野台地に所在する。

大宮台地の東端部に位置する大宮市には14、下加遺跡がある。市内を流れる鴨川、切敷川とに狭まれた独立支台上の西側に立地するこの遺跡は研神史上重要な遺跡である。本遺跡出土の阿玉台式土器はⅡ式段階のものであるが、勝坂式の影響を強く受けている。大宮市の北に位置する上尾市には15、秩父山遺跡が所在する。地形上、大宮台地の北東端に立地する。



● 阿玉台系土器を主体とする遺跡
▲ 勝坂系土器を主体とする遺跡

番号	遺跡名	所在地	種別	番号	遺跡名	所在地	種別
1	石関遺跡	栃木県　矢坂市	●	15	秩父山遺跡	埼玉県　上尾市	●
2	石神遺跡	栃木県　塩谷郡高根沢町	●	16	池田遺跡	埼玉県　新座市	●
3	下広岡遺跡	茨城県　新次郡桜村	●	17	亀居遺跡	埼玉県　入間郡大井町	▲
4	中山新田II遺跡	千葉県　柏市	●	18	膳棚遺跡	埼玉県　所沢市	▲
5	水砂遺跡	千葉県　柏市	●	19	白旗塚遺跡	埼玉県　所沢市	▲
6	東平賀遺跡	千葉県　松戸市	●	20	動坂遺跡	東京都　文京区	●
7	子和清水貝塚	千葉県　松戸市	●	21	貫井南遺跡	東京都　小金井市	▲
8	西山遺跡	千葉県　鎌ヶ谷市	●	22	木曽中学校遺跡	東京都　町田市	▲
9	大堀込遺跡	千葉県　鎌ヶ谷市	●	23	藤の台遺跡	東京都　町田市	▲
10	高根木戸遺跡	千葉県　船橋市	●	24	神谷原遺跡	東京都　八王子市	▲
11	飯山満東遺跡	千葉県　船橋市	●	25	当麻遺跡	神奈川県　相模原市	▲
12	蕨立遺跡	千葉県　千葉市	●	26	荏田第10遺跡	神奈川県　横浜市	▲
13	草刈遺跡	千葉県　市原市	●	27	井上尻遺跡	神奈川県　横浜市	▲
14	下加遺跡	埼玉県　大宮市	●	28	三原田遺跡	群馬県　勢外郡赤城村	●

第15図　遺跡分布図

新座市は荒川と多摩川によって間析された武蔵野台地の荒川に面した支台上に位置する。本市には16、池田遺跡が所在する。本遺跡は荒川に注ぐ黒目川の右岸上に立地する。入間郡大井町に所在する亀居遺跡は荒川の支流新河岸川に注ぐ福岡江川の水源地近くに立地する。検出された住居跡からは、狢沢式土器と阿玉台Ⅰb式土器が共伴している。その共伴関係からも県内では注目すべき好資料であろう。所沢市には18、19の膳瀬、白旗塚の両遺跡が所在する。両者とも新河岸川に注ぐ東川流域に立地する集落跡である。白旗塚遺跡報文によれば、周辺の遺跡分布について「柳瀬川流域は崖続上にほぼ線的に遺跡が展開するのに対し、東川流域では、本遺跡、小前指中学校庭遺跡、膳柵遺跡など点的な分布を呈」するとし、河川と遺跡占地の在り方に密接な関連があると論じている。（小暮1981）

以上の様に埼玉県は複数の大河川によって分断されているため、個々の地域で様相が異なる様である。地理的、地形的な観点から相互の関係を資料増加を待って検討する必要があろう。

東京都

東京都は埼玉県より延びる武蔵野台地の南部と多摩川右岸の諸丘陵の北部からその地形が構成される。

20、動坂遺跡は武蔵野台地南東部端の比較的低位の台地上に立地する。21は貫井南遺跡で小金井市に所在する。地形的には多摩川左岸、武蔵野台地の下位段丘、立川段丘上に立地する。付近を流れる野川の流域には多くの遺跡が存在し、縄文中期の集落跡も多い。

多摩丘陵は北に武蔵野台地、南に相模川に開析された相模原台地に狭まれ、以前より縄文時代の遺跡の密集地として知られていた。22、23は木曽中学校遺跡、藤の台遺跡で、多摩丘陵を開析する境川流域の低位段丘陵上に立地する。前者では狢沢、阿玉台Ⅰb式土器の良好な資料を伴う住居跡が検出されており、特に第３号住居跡は本来的様相の阿玉台Ⅰb式土器を炉に設置している。後者も同時期の住居跡が検出されているが、土器の共伴関係は狢沢の比重が高い。八王子市には24、神谷原遺跡が所在する。本遺跡は多摩丘陵の一部、小比企丘陵の南縁に位置する。五領ヶ台式期から藤内式期にかけての集落が明確にされ、西関東の該期集落を研究する上で最も重要な資料と言えよう。また、神谷原Ⅲ期（新道式期）には大形住居跡及び、長方形柱穴列を伴い、構築技術の側面からも興味深い事例となろう。

多摩丘陵に分布する遺跡では、阿玉台式土器の在り方に特異性が認められる。それら極少数の例外を除いて、住居形態が比較的古い段階、すなわち阿玉台Ⅰb、狢式期により３－b型が一般的となっているにもかかわらず、炉の埋設土器に阿玉台式土器を使用している例が比較的多いという点である。これは後に述べる当麻遺跡でも認められる特徴である。

神奈川県

神奈川県域の多摩丘陵は北縁を多摩川に、県史を北西から南へ流れる相模川、またそれらの支流によって開析され、樹枝状支谷が形成されている。県南の一部は丹沢山地より延びる大磯丘陵が位置する。

25の当麻遺跡は相模原市に所在し、地形的には相模川左岸の段丘上で高位の田名原面に立地する。該期の住居跡は集落の内側、段丘上でもやや奥まった地点に占地している様である。26、荏田第10

遺跡は鶴見川に注ぐ早淵川や谷本川に開析された支谷を臨む舌状台地上に位置する。27は横浜市港南区に所在する井土尻遺跡である。遺跡の周辺は海岸線と笹下川によって形成された丘陵となっており、平坦部の少ない複雑な地形を呈している。本遺跡も斜面部に立地している。住居跡は1軒のみであるが、その形態と土器の関係が興味深い。地理的位置から千葉県南部との関連も考えられるかもしれない。

群馬県

群馬県における該期資料については比較的貧弱と言わざるを得ない。地形は大勢を占める山地部と、利根川やそれに注ぐ碓水川等によって切り開かれた丘陵地帯と扇状地より構成されている。利根川は県央を南北に縦断して流れ、埼玉県境を経て千葉、茨城県境に至る。よって、この流域は阿玉台式土器の分布圏との強い関係が考えられ、今後資料の増加が見込まれる。

28、三原田遺跡は赤城山麓の利根川と天竜川の合流地点付近の台地上に立地する。本稿で取り上げたのは8区20号住居跡のみであるが、赤山の言う住居形態「A類型」に該期とものが含まれると考えられる。(赤山1977)。

以上、各遺跡の立地について概略的に述べた。次に分布の様相と集落の在り方について若干触れておく。

関東地方における該期集落の各住居形態は分布図を見た限りでは、比較的単純な分布傾向を持っている様に思われる。すなわち、大河川という地形的障害により住居形態類型の偏差が出てくると考えられるのである。特に注目されるのは利根川下流域から千葉県央にかけての地域と荒川以西地域との明確な差異である。前者については1－a、2－a、3－a型が主体的である。後者では3－b型が大勢を占め、バリエーションは規模の大小炉の形態、主柱穴数等に表れるのみで、形態自体の変化は顕著ではない。これを時間的に見ると、前者では阿玉台Ⅰb～Ⅱ式段階で前記の形態が継続し、Ⅲ式期より3－b型が顕在化する。また、Ⅱ式段階より勝坂系土器の共伴が顕著となる。対して後者では、3－b型が継続しているが、神谷原遺跡で見られる様な大型住居が新道段階より出現する。また、土器の面では共伴する阿玉台式土器がⅡ式の新しい段階より勝坂ナイズされてゆくという現象が認められる。これらに対して栃木、群馬等のいわゆる北関東では阿玉台式土器とともに3－a型が一般的なものとなっている。筆者はこれらの差異を生み出した主たる要因に大河川を求めたい。利根川はその流れを阿玉台式土器分布圏の拡大、延長の一大要因となり、荒川はその西進の妨げとなっている。もっとも後者については完全としていない。東西関東の阿玉台Ⅱ式、新道式段階における緩やかな動態は前記の仮定から解すことができると思われる。また、東西関東とも互いの生活様式、技術等を受容する過程として該期を把えることもできよう。

関東地方というややマクロ的視野から集落分布を見てみたが、集落内における該期住居跡の分布はどうであろうか。これについては前節でも触れたが、ここで確認しておきたい。

本稿で取り上げた資料の内、小規模な集落と考えられるのは、東関東の中山新田Ⅱ、水砂、飯山満東の各遺跡、西関東の藤の台、荏田第10、井戸尻遺跡がある。これらについて占地状況を見ると水砂は台地のやや奥まった地点に、他は台地縁辺または斜面上に占地している。高根木戸、当麻等の中期の大集落でも該期に限定すると同様の傾向が認められ、その占地状況とともに小規模な集落

が多いことが該期の特徴と考えることができよう。ただし、子和清水、神谷原の両遺跡は様相が異なる。前者は阿玉台Ⅱb式期より住居跡群は二群性を有し、環状化の傾向が見られる(註16)後者は狢沢式段階より環状の様相を呈し、藤内式段階には眼鏡状をとるようになる。神谷原遺跡の報告者はこの様相について、中央土壙群を墓域と考え、その成立期を狢沢式期において集落も該期より墓域をとりまく様に展開し、集落の開始段階より墓域を意識し、環状化を進めていったという見解を打ち出している（吉田他1982)。すなわち、集落の数世代に渡って計画的に営むという説をとっている。環状集落の生成過程には諸説がある。主なものとしては、前説の他、反復居住の結果として環状化という考え方もあるが、集団移動論等、より高次の方法からのアプローチを必要とするため、本稿では検討を避けることとする。

以上、集落内の住居の占地について若干触れたが、該期集落の特徴として一部の例外を除いて小規模なものが主体的であること、住居占地に主として斜面、斜面付近、台地基部を選んでいるという２つの点を提示しておく。

おわりに

以上、縄文時代中期前葉という限定された時間枠の中で、住居、集落の在り方について私見を述べてきた。該期の内容について語るとき、最近まで資料不足に泣かされ、特に勝坂直前型式の狢沢式などについては土器片レベルで研究を進めざるを得ないという状況があった様に思う。現在、資料が増加しつつあるが、やはり分析対象の不足は否めない。

本稿では特に阿玉台式土器を伴う住居跡の特性とその変遷過程に主眼を置いた。すなわち、炉を持たない住居群が、どの様な過程を経て中期型とも呼称すべき３－ｂ型の住居形態をとる様になるか、それを住居構築という技術的側面と地理的環境ん分布、占地等の観点から解明しようと考えたわけだが、短かい紙数でやや欲張り過ぎたようである。また、扱う資料の時期について下限を明確にし得なかったことなど反省点が多くある。今後、遺物面からのアプローチも含めて該期集落の検討を続けてゆきたい。つたない文章であるが、御批判いただければ幸いである。

（昭和60年４月７日脱稿）

註１　平面形の相異は以前より、竪穴住居の分類を行なう際、重要な要素となってきたが、研究者の目により様々な表現がなされる場合が多い。本稿における平面形の分類は鈴木氏のものより名称を単純化してある。また、氏のいうＣ型は本稿では扱わなかった。

註２　橋本正氏は２～４本の主柱構造を「単純構造」とし、５本以上のものはこれを組み合せて「複合構造」と呼称している。また、２本柱のものは本稿では他と分類しているため、本類型には含めていない。

註３　袋状土壙の機能に関しては諸説あるが、貯蔵穴を持つ特異な例とすることができるかもしれない。

註４　117号住居跡出土の阿玉台II式土器は西関東に多い勝坂ナイズされたタイプで藤内Ｉ式土器を伴っている。

註５　６号住居跡については遺物の記載がない。報文中では「住居址内の遺物は中央に集中するが殆んどが阿玉台式で、しかもいずれも別個体で接合しない」とある。５号住居跡の遺物は勝坂末のもので、６号住か５号住を切るならば、阿玉台IV式土器が出土していることになる。筆者としては、５、６号住の重複部のセクションを疑問視している。

註６　第59号住居跡については遺物が貧弱なため除いてある。

註７　報文中、第48号住居跡の炉に埋設された土器について土器胎土中に雲母混入がなく、阿玉台式土器とは若干の差異があるとしている。

註８　同様の例に東方第13遺跡がある。今回は文献を入手し得なかったため除いてある。

註９　阿玉台式土器を伴う住居跡に神村、渋谷両氏の考えをあてはめるには無理があると思われる。両者とも炉の位置をかなり重視しているからである。また渋谷氏は自論について「阿玉台式土器を出土する住居址には適合しない。」としている。平面設計過程に他の方法を必要としよう。

註10　炉の有無によって使い分けることが必要であろう。

註11　関東地方全域より受けた印象であるが、千葉県に限って言えば１－ａ、２－ａ型が大勢を占めている。

註12　橋本正氏の「複合構造」がこれにあたる。

註13　藤の台遺跡報文中、炉の在り方について触れ、埋設土器炉を主体的とすることを該期住居跡の特徴の一つとしている。

註14　茨城県教育財団によって調査された筑波郡谷和原村大谷津Ａ遺跡で、該期住居跡が多数検出されたという。報告が待たれる。

註15　船橋市内には他に水系を異にする海老ヶ作貝塚がある。本遺跡でも類似遺構があるが、平面図等が未発表のため、本稿では除いた。また、本遺跡は時期や位置的にも高根木戸遺跡との関連が考えられる（船橋市教育委員会1982）。

註16　未発掘部分に該期が存在したとすれば、集落開始当初より、環状を呈していまことも考えられるが、現状では２つの住居跡群が斜面近くに占地していたと考えた方が妥当であろう。

引用・参考文献

赤山容造　「三原田遺跡」資料合冊　群馬企業局　1977

赤山容造他　「三原田遺跡（住居篇）」群馬県企業局　1980

安孫子昭二　「貫井南」　小金井市貫井南遺跡調査報告　小金井市貫井南遺跡調査会　1974

安孫子昭二他　「文京区動坂遺跡」　動坂貝塚調査会　1978

岩井住男他　「膳棚」『鳳翔』7　1970

海老原郁雄他　「石関（彦左ヱ門山）遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第25集　1979

岡崎文喜他　「蕨立遺跡を中心とした縄文時代中期初頭集落址の研究」『遺跡研究論集』II　1982

金子智江他　「秩父山遺跡」　上尾市文化財調査報告第5集　1978

金子直行他　「大山」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第17集　1982

鎌ヶ谷市教育委員会　「西山、大堀込遺跡」『鎌ヶ谷市史』上巻　1982

神村透　「下伊那地方の縄文後半の様相―住居址を中心に―」『日本民族文化とその周辺』考古篇　1980

川口正幸他　「藤の台遺跡」III　藤の台遺跡調査会　1982

川口正幸他　「町田市木曽中学校遺跡」　木曽中学校用地内遺跡調査会　1983

川原由典他　「石神遺跡」　栃木県埋蔵文化財調査報告第49集　1982

小泉功他　「東部遺跡群発掘調査報告書Ⅰ」　文化財調査報告書第9集　大井町教育委員会　1980

小久貫隆史他　「草刈遺跡A区（第1次調査）鶴牧古墳群　人形塚」　千原台ニュータウンII　1983

後藤和民　「縄文集落の概念」『縄文文化の研究』8　1982

坂本彰他　「荏田第10遺跡」　港北ニュータウン地域内文化財調査報告IV　1974

佐藤達夫　「土器型式の実体―五領ヶ台式と勝坂式の間―」『日本考古学の現状と課題』日本歴史学会　1974

斯波治　「池田遺跡発掘調査報告書」　新座市埋蔵文化財調査書第2集　新座市教育委員会　1976

渋谷文雄　「竪穴住居址の柱穴位置と規模について―原始住居復元の一考察―」『考古学雑誌』　1982

白石竹雄他　「飯山満東遺跡」　房総考古資料刊行会　1975

白石浩之他　「当麻遺跡、上依知遺跡」　神奈川県埋蔵文化財調査報告第12集　1977

杉本当次他　「日本のすまいの源流」『日本基層文化の深究』　1984

鈴木美治　「阿玉台期における竪穴住居跡の形態について―考察―茨城及びその周辺地域を中心として―」『年報』3　財団法人茨城県教育財団　1984

清藤一順　「縄文時代集落の成立と展開―国分谷周辺区域における前期・中期を中心として―」『研究紀要』2　千葉県文化財センター　1977

清藤一順他　「館林・水砂そ花前II―Ⅰ」　常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　1982

清藤一順他　「花前Ⅰ・中山新田II・中山新田III」　常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書II　1984

高根信和他　「下広岡遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告X　1981

谷井彪　「いわゆる阿玉台Ⅰb式とその周辺の土器群について」『土曜考古』6　1982

谷井彪他　「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1982　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982

土肥孝　「阿玉台Ⅰb式以前の土器」『土曜考古』　1981

戸田哲也　相原俊夫　「横浜市港南区井戸尻遺跡とその出土遺物」『神奈川考古』15　1983

中島宏　「金堀沢遺跡」　入間市金堀沢遺跡調査会　1977

中村倉司　「埼玉県における阿玉台式土器研究の現状」『土曜考古』3　1981

中村紀男　「阿玉台式土器文化研究の原点と二三の問題」『栃木県史研究』13　1979

並木隆他　「白旗塚遺跡」　所沢市文化財調査報告書第6集　1981

西村正衛　「阿玉台式土器編年的研究の概要―利根川下流域を中心として―」『早稲田大学研究科紀要』18　1972

橋本正　「竪穴住居の分類と系譜」『考古学研究』91　1976

松戸市教育委員会　「子和清水」遺構図版編　1976

松戸市教育委員会　「子和清水」遺物図版編　1978

古里節夫他　「坂之台遺跡・東平賀遺跡第3次調査」　松戸市文化財調査小報16　1983

宮内正勝　「下加遺跡」　大宮市教育委員会　1965

宮本長二郎　「古代の住居と集落」『建築』　講座・日本技術の社会史7　1983

吉田格　新藤康夫他　「神谷原II」　八王子市椚田遺跡調査会　1982

研 究 紀 要

1 9 8 6

昭和61年８月20日　印刷

昭和61年８月25日　発行

発　行　　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

印　刷　　望　月　印　刷　株　式　会　社